

第29期世田谷区社会教育委員の会議活動報告書

—地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみづくりに向けて—

令和4年4月8日

世田谷区社会教育委員の会議

目次

はじめに	1
第1章 会議の検討にあたっての課題認識	2
1 事例研究①「おやまちプロジェクト」現地視察と意見交換	
(1)「おやまちプロジェクト」とは	
(2)意見交換(要約)	
2 事例研究②「協力・連携・協働の活動シート」から関係性のしくみの検証	6
(1)事例紹介	
(2)意見交換	
第2章 「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」に向けた方向性と方策の検討	17
1 グループワーク①	
(1)地域グループ付箋図	
(2)学校グループ付箋図	
(3)意見交換	
2 グループワーク②	21
(1)地域グループ付箋図	
(2)学校グループ付箋図	
(3)意見交換	
第3章 「地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみ」の具現化	27
1 課題抽出・整理	
(1)連携・協働する意味や必要性とは何か	
(2)連携・協働のメリットとは	
(3)地域と学校をつなぐ存在とは	
(4)連携・協働のデメリットと阻害要因とは何か	
(5)地域と学校は対等でなければならないのか	
2 一提言ー地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみづくりに向けて	34
(1)方策1 連携に必要なジョインターの育成とネットワーク化	
方策案①地域の各種イベントにPTA(保護者)が無理なく参加 して後継者が育つようなしくみづくり	
方策案②ワークショップやシンポジウムの開催	
(2)方策2 誰もが参加できる環境整備	
方策案①「地域の未来を考える会(仮称)」の開催	
方策案②誰もが「やってみたい」を発信し共有できる場の提供	
(3)方策3 今後の発展に向けた新たな視点と手法	
方策案①地域資源の活用	
おわりにー(坂倉議長より)ー	41

資料

☐	資料 1	協力・連携・協働のメカニズム（第 2 回定例会配布資料）	4 3
☐	資料 2	「連携・協働」関連ワード（第 3 回定例会議事録抜粋）	4 4
☐	資料 3	グループワーク①《地域グループ》話し合い概要	4 7
☐	資料 4	グループワーク②《学校グループ》話し合い概要	4 8
☐	資料 5	グループワーク②課題抽出	4 9
☐	資料 6	会議の活動経過（第 1 回～第 8 回）	5 0
☐	資料 7	第 2 9 期世田谷区社会教育委員名簿	5 1
☐	資料 8	第 2 9 期世田谷区社会教育委員の会議事務局名簿	5 2

はじめに

教育委員会では、第2次世田谷区教育ビジョンの基本的な考え方に基づいて、「一人ひとりの多様な個性・能力を伸ばし、社会をたくましく生き抜く力を、学校・家庭・地域が連携してはぐくむ」を推進している。基本的な考え方の一つにある「学校・家庭・地域との連携」では、世田谷区では、学校選択制を採らず、長年にわたって地域と一体となり、地域の様々な教育力を活用した「地域とともに子どもを育てる教育」を実践しており、教育に関する家庭や地域の声に応えていくためには、学校がより地域に開かれ、家庭や地域に学校運営や教育活動への参画を積極的に求めて、地域と一体となって豊かな教育の場をつくりだしていくことが必要であるとしている。

また、これまでの「世田谷9年教育」は、義務教育の9年間を一体として捉えて行われていたが、その取り組みを継承しながら、キャリア教育を柱として、区立幼稚園の2年間、小中学校の9年間を合わせた11年をもとに、乳幼児から大人までの成長や地域社会との関わりをプラスした教育のしくみを「せたがや11+（プラス）」として令和2年度より開始している。

このような取り組み以外にも、区内における地域と学校の連携・協働のしくみとしては、地域運営学校や学校支援地域本部をはじめ、総合型地域スポーツクラブなど行政主導のほかに、住民主導の子どもぶんか村、おやまちプロジェクトなど様々な形態がある。

なかでも「おやまちプロジェクト」は、尾山台付近の住民、学校、商店、大学など様々な人たちが垣根を越えて集まるチームであり、これまで少し遠かったみんなをつないで一緒に学んで考える場所として、地域と学校が連携・協働しながら多種多様な活動をしているプロジェクトである。さらに特筆すべきことは、「おやまちプロジェクト」はわずか2年で一般社団法人格を取得されるなど、現在も精力的に活動していることである。

上記のようなことを踏まえ、第29期社会教育委員の会議（令和2年10月～令和4年5月）では、新型コロナウイルス感染症の影響により、開始時期の遅れや度重なる会議の延長などを乗り越え、「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」をテーマに、「おやまちプロジェクト」や各委員の事例等から、連携・協働する背景や課題等を検証し、新たな連携・協働のプロジェクトとなるしくみについて提言するに至り、活動報告書として取りまとめた。

第1章 会議の検討にあたっての課題認識

1 事例研究①「おやまちプロジェクト」現地視察と意見交換

第29期の会議のテーマは、「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」であるが、この「連携・協働」という言葉はよく使われがちだが、「連携」と言ってもすぐ連携できるわけでもなく、そこには連携や協働という状態になるメカニズムが必要ではないか。また、理想はどちらかがどちらのためということではなく、地域とともにある学校のように、どうやったらそれが実現できるのか、あるいは実現できる事例は何がそうになっているのかをしっかりと見ていくことが重要であるという認識から、はじめに多種多様な活動を実践している一般社団法人おやまちプロジェクトの現地視察と代表理事の高野雄太氏からの説明を受けた。

(1)「おやまちプロジェクト」とは

○ 自己紹介

・私は、ハッピーロード尾山台という商店街で63年間続いている洋品店の三代目である。なぜこのような活動をやるようになったかといえば、私には3人の子どもがいるが、私自身もこのまちで育っているということもある。そして、三代目ということもあり、まちの様々な役職をやらせていただく中で、地元の友達がいて、子どものパパ友やママ友、商店街の先輩方や町会の方など、あらゆる方々との接点を持っていく中で、自分が生き暮らしてきたまちがどんどん良くなってきたことを再認識するようになった。

・特に子育てするようになって感じたことは、尾山台での子育てはすごくやりやすいいい環境だと思っている。この環境は、一朝一夕にできるものではなく、長い年月をかけていいまちになっていくので、先輩方が築き上げた尾山台というまちを自分の世代で悪くしてはいけないし、引き継がなければという思いがいつしか芽生え、8年位前からまちづくりの勉強を個人的に始めた。

○ 「おやまちプロジェクト」に至った経緯

・まちづくりの勉強をすると地方の事例が多い。地方の課題はまちがなくなってしまうなどの大きな課題が目前にある。しかし、世田谷は人口も増えているし、ある程度治安が安定し、教育水準もあり、環境面でもとてもいいまちであるということで、地方にある課題はないのではないかと考えている。あるとき、それならば課題解決ではないアプローチがあってもいいのではないかとということに気づいた。これが「おやまちプロジェクト」につながっていく気づきである。また、勉強していく中で、従来

のまちづくりは、大金をかけて再開発や土木中心のまちづくりなどの非日常をつくることが前提としてあったが、これからの時代は今そこにあるものをうまく活用して、日々の暮らしの豊かさをより大きくしていくことであり、少しずつ紡ぐように自分たちで暮らしを豊かにしていくというのが新しく必要な考え方なんだということを勉強している中で教わった。

もう一つは、一人の力は小さいので仲間を見つけてやろうということを手伝った。これは、商店街の人たちとだけやるとか、町会の人たちだけでやるとか、PTAの中だけでやるとかではなく、違う分野や得意分野の違う人たちとなど、様々な属性の人たちと一緒に仲間になってやっていくことである。要は従来の属性の境を超えていくということで、組織の境を超えていき、一緒に協働していくという営みである。

この二つの視点を学び、このことから課題解決ではない、尾山台の尾山台らしいまちづくりのあり方というのをつくっていきたいと思ったのがきっかけである。

- ・5年前にひらめいて、尾山台には大学があることを思い付き、東京都市大学に電話をして私の考えを伝えて、だれかいい先生を紹介してほしいとお願いしたところ、社会教育委員の会議議長である坂倉先生をご紹介いただいた。先生はコミュニティマネジメントを専門としており、駅と学校を往復するだけでまちの人とのコミュニケーションが取れないものかと憂いていたということもあり、すぐに意気投合し、何か一緒にやりましょうというのが、活動の第一歩となっている。

- ・尾山台商店街には歩行者天国があるが、この空間に学生たちのイベントを押し込み非日常をつくるのではなく、大学で行われているゼミをこの場にもってこようということになった。このとき分かったことは、明らかに異質な感じがするのだが、ホワイトボードに東京都市大学と書いてあるので、地元の大学の学生と分かった瞬間、誰も文句も言わないし、地域の人はしっかり自分の地域にある大学という認識を持っているため、だったらこの場でやっていてもいいという許容することだった。

次に行ったのが、「青空教室」といって、坂倉先生にまちの人たちの前で講義をしてもらうことである。区の施設の前のエントランスで行ったが、当時私はPTA会長もやっていたので、保護者の方や町会の役職の方など、様々な方に声をかけて集まってもらった。このような活動を通して実感したのは、これまでつながっていなかったもの、「地域資源」や「場」など、あらゆる地域のリソースを新しくつなげる、つなげ直すということをやってみると、ある化学反応が起きてすごく面白いことが起きるということである。

- ・そしてある時、当時の尾山台小学校の校長先生（現教育長）から電話があり、最近、大学の先生と面白いことをやっているようなので、一度その大学の先生と話をしたいということと言われ、校長室に行くことになるのだが、もう一人小学校のおやじの会

に所属されていた方と4人で会うことになった。商店街、大学、小学校、地域の保護者という全然背景の違う4人だが、みんなの思いが集約され、「つながり」と「学び」をキーワードに、とにかく何かやってみようということになった。そして、4人が発起人となり、キックオフとして「まちの未来を考えるワークショップ」を企画した。場所は尾山台小学校の図書室をお借りして、集まったのは、町会長や商店街の理事長、PTAやおやじの会の方、大学生のほかに東急電鉄の方や行政の方など、様々なステークホルダーが集合し、まちの歴史を学んだ後にどんなまちでの暮らしがあったらいいのかなど、まちのこれからを考えるワークショップを行った。この会はすごく盛り上がり、私自身もすごく手ごたえを感じていた。それは、みんな尾山台のことがすごく好きなんだということもそうだが、これだけまちに対する思いを持っている人たちが、これまでまちに対する思いを誰かにプレゼンするなど思いを伝える機会がなかったので、そういうひとたちが世田谷にはたくさん住んでいるため、そういう人たちをつなげていったらもっともっとまちの暮らしがよくなるのではないか、という手ごたえを感じたからである。

・これが最初のプロジェクトになるのだが、一つの事例を紹介すると、商店街にあるワイン屋さんを緩やかにつなげる場として開放したところ、そこに参加された女性の方が、いつか子ども食堂をやってみたいと自分の中の気持ちを語りだした。そして、一緒にやってくれる人を募ったところ、何人もの方が手を挙げてくれ、現在、プロジェクトの一つとして活動している。

私たちが大切にしていることは、すべての起点はここで「出会う・つながる」ということで、「おやまちプロジェクト」の活動がなければ、出会わないであろう人たちが出会う場所をつくり、それを何度も繰り返していくうちに仲良くなっていく。仲良くなったなら、語り合う聞き合うという関係性ができ、聞いているうちに共感してまた仲間になっていく。仲間ができれば勝手にプロジェクトが動き出す。それで動き出したプロジェクトがさらに新たな仲間をつくり、出会いの拠点・起点になっていく。

現在主な活動は12であるが、小さいものを入れれば語り尽くせないくらいある。このように様々な取り組みがあるが、自分が中心となっている取り組みは2つか3つくらいである。あとは自分が知らないうちに話が進み「あ、それやるんだ」ということがよくある。通常、ある程度活動が決まっており、その立ち上げた代表がいなくなると、組織が立ち行かなくなるとか、活動ができなくなってしまうということがよくあるが、ここでは全くない。

(2) 意見交換 (要約)

(委員) 「青空教室」では、どのような話をされたのか。

(議長) 実は私にとってもすごい気づきだったが、本来、商店街のイベントの一環だったので、商店街について話をすべきだったのだが、商業はインターネットに移っていく中で、昔の賑わいをこれから取り戻そうとか言ってもそれは無理な話なので、このまちで皆さんがずっと暮らしていくとしたら、30年後どんなふうに暮らしていきたいのかを投げかけた。商店街を何とかしようとか、まちづくりを頑張ろうと言われても、それは自分たちのことではないという思いがあると思ったので、それよりも30年後どうかと言われた瞬間、自分の子どもが結婚して孫ができているかもしれないというようなことを想像された方が多く、まちの未来を考えることは自分のことだというように考えられるようになったようだ。私にとっても、普通に暮らしている人ってまちのことを考える機会はないのだが、何かきっかけさえあれば自分の未来を暮らしの延長ごととして想像してもらえるのだと学んだ。

(高野氏) 自宅を購入された方も結構多くいるし、自分の30年後というと、子どものことや老後のことなど、特にこのまちでどう人生を締めくくるかということを実体的に考えることができたのではないかと感じている。

(委員) 課題解決を目的にしないという言葉は非常にすごいなと思っている。何をやるにしても課題解決に行き着くことがあるが、そうではなくつながりが大切なんだということでもいいのか。

(高野氏) そのとおりである。私たちの活動を「プロジェクト」と呼んでいるが、あるプロジェクトでは、小学生から高齢者まで幅広いステークホルダーに集ってもらい、一日かけてのワークショップやフィールドワークを行った。これは、まちの古い写真を町会の方や長く住んでいる方から集めて、その写真の同じ場所、同じアングルから今の写真を撮るというワークショップである。30年前のまちの木は小さかったが、30年後はこんな大きく育っているという歴史の流れを体感したり、まちを見たり歩いたりして商店街の店主から昔話を聞くなどのフィールドワークをして、学んだことを小学生たちが新聞にまとめ、まちの大人の前で発表するというものである。

私たちの活動は、この活動がなかったら出会わなかったであろう人たちが、出会う場をつくることから始まる。出会ってつながりをつくっていくということが、すべての活動の起点になっている。

ワイン屋さんから子ども食堂へ発展した話もしたが、とにかく人が偶然出会う、つながりをつくるということから始め、やってみよう精神でスタートして偶然起こることを大切にしているのが「おやまちプロジェクト」である。

(委員) 一般社団法人格を取られているが、そのあたりの話を聞かせてほしい。

(高野氏) なぜ法人化したと言え、法人格を持っていないと取りに行けない助成金があり、それで法人化が必要だということがきっかけである。また、法人格を取得すると、まちに対する信用力が上がる。任意団体だと、どこまで行っても遊び感覚というか、真剣さが伝わらないと思っている。

(議長) 活動されていて、連携・協働が起こる秘訣とは何か教えていただきたい。

(高野氏) 連携とか協働って大上段に構えるのではなくて、本当に日々の小さなつながりの積み重ねで、様々なプロジェクトができているので、互いをよく知ることだと思う。普段からコミュニケーションが取れていれば、それだったらやっておくよみたいな関係性ができるので、信頼関係さえできていれば、そんな大上段に構えずに行えると思っている。

(委員) 話を伺って、皆さん自分から動いているように見えるし、みんながこのまちをよくすることを自分のこととして考えているのではないかと思った。

(委員) あとは自分から楽しんでいくというか、楽しまないと駄目なんだと感じた。

(委員) やらなければいけないことではなく、やりたいことを活動にしているのが本当にすごいと思った。

(委員) 尾山台のような環境はどこにでもあるわけではないので、まずどこにアプローチして、どういうつながりができて、どんなコミュニティができるのかというのを区内の各地域で自分たちのできることを考えることが必要なのではないか。

2 事例研究②「協力・連携・協働の活動シート」から関係性のしくみの検証

尾山台の例は、どこの地域にもある違う別々のセクターが一緒に何かをすることで動いている。では逆に、何でそうなっているのかというよりも、何で普通にそういうことが起こらないのか、それを隔てているものはどういうポイントなのか、また、どういう条件が整うと連携・協働が生まれやすいのかなどを「活動シート」を作成し、委員の経験も含め、地域と学校の関係性から見えてくるしくみについて検証した。

(1) 事例紹介

【活動シート1】

活動名	① 学校運営委員会				
目的	一定の権限と責任をもって学校運営に参画し、学校教育を支援する活動を検討・承認する合議体の機関。校長のブレーンとして学校の課題解決に向かう。				
関係性	協力	連携		協働	
関係先	委員（地域住民、保護者、就学予定児の保護者、卒業生、有識者、校長）				
支援内容	・学校経営基本方針についての検討と承認 ・保護者、地域、学校が協働して取り組む事業についての検討と承認 など				
キーパーソン	委員長、学識経験者				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	学校運営委員会での検討・承認を経ることで、学校の判断についての後押しを得られる。また、教育現場とは違う視点からの意見が参考になる。				
課題	学校の実情にもよるだろうが、法令上の規定にあるような学校や教育委員会に対する積極的な意見がなかなか出ない。				
その他					

【活動シート2】

活動名	② 学校協議会				
目的	地域による学校支援の基盤。 「地域への情報発信の場」「地域の総会的な場」				
関係性	協力	連携		協働	
関係先	町会・自治会、青少年地区委員会、民生・児童委員、青少年委員、行政機関等				
支援内容	これまでは、児童の健全育成、地域防災・防犯、教育活動の充実等について検討してきたが、本年度は実施できていない。				
キーパーソン	学校運営委員長、学校支援コーディネーター				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	本年度は実施予定なし。				
課題	本年度は実施予定なし。				
その他					

【活動シート3】

活動名	③ 学校関係者評価委員会				
目的	学校の取組や自己評価について客観的に評価を行い、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進める。				
関係性	協力		連携		協働
関係先	委員（保護者、元保護者、卒業生、学校協議会会員、第三者）				
支援内容	・「関係者等アンケート」の内容承認と結果分析、校長等との意見交換。 ・自己評価の結果及び今後の改善方策等の評価。				
キーパーソン	委員長				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	評価はこれからだが、客観的視点での評価に基づいた「学校関係者評価委員会報告書」学校経営方針策定において重要な資料となることが期待できる。				
課題	各委員が実際に学校の教育活動を観察する機会を設定することがなかなか難しい。				
その他					

【活動シート4】

活動名	④ 学校支援地域本部				
目的	学校の依頼に応じて、学校の教育活動を支援する。				
関係性	協力	連携		協働	
関係先	保護者、地域の学校支援者、ボランティア				
支援内容	授業の補助、校内外の環境整備、登下校時の安全確保、学校行事の運営支援等				
キーパーソン	学校支援コーディネーター				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	学校支援者との交流も含めた教育活動の充実と教員の負担軽減を同時に進めることができる。				
課題	従来の保護者ボランティアやPTA活動の内容とも関連付け、活動内容を整理していく必要がある。学校支援コーディネーターが在籍できる時間が不足している。				
その他					

【活動シート5】

活動名	⑤ 1年生生活科「あきといっしょに」				
目的	季節の移り変わりに気付き、様々な秋を見付け、秋に親しむ。				
関係性	協力		連携		協働
関係先	城南環境学習支援グループ				
支援内容	三宿の森公園における秋見付けの学習において、公園内を歩きながら、草木花実の名前や特徴を教えていただいた。（ボランティア8名）				
キーパーソン	リーダー（筑木正彦さん）				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	児童1グループに1名のボランティアの方が付いてくださったので、自然に十分に親しむことができ、体験的な学習が充実した。				
課題	児童の人数とボランティアの人数の関係で、活動時間がやや短くなった。児童への対応について、ボランティアの方にやや温度差があった。				
その他					

【活動シート6】

活動名	⑥ 2年生生活科「まちたんけん」				
目的	地域の施設や様々な人々について、見学したりインタビューしたりすることを通して、まちの人が地域のためにしていることに気付き、まちへの愛着を深める。				
関係性	協力		連携		協働
関係先	まちづくりセンター、幼稚園・保育園、郵便局、東急バス営業所、北沢八幡神社、他6社				
支援内容	見学やインタビューへの対応、資料提供、発表会への出席。				
キーパーソン	学校支援コーディネーター				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	各種の仕事に関わる本物に触れ、体験したり、インタビューしたりすることで、より深くまちを支える仕事や人々のかかわりについて学ぶことができた。				
課題	コロナ禍により、体験できない内容があったり、人数制限があったりした。訪問先の開拓について、さらに学校支援コーディネーターを活用したい。				
その他					

【活動シート7】

活動名	小学校運動会のオンライン配信				
目的	コロナ禍での開催を決めた下北沢小学校の運動会を、「三密」を避けるため、参観したい保護者が来校せずに自分の子どもの活躍を見られるようにライブ配信する。				
関係性	協力		連携		協働
関係先	下北沢小学校、下北沢小学校おやじの会				
支援内容	機材、人材の提供。当日は、セッティング、撮影などの作業をおやじの会が担当。3か所のカメラから運動会の様子を配信した。				
キーパーソン	おやじの会会員、副校長ほか教職員				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	保護者は来校の人数制限を守り、来校できない人は家庭でライブ配信を視聴した。例年より短縮された運動会だったが、児童たちの活躍の場を体感、共有できた。				
課題	費用が掛かることだが学校から出せない性格のものであったので、寄付を募る募金箱が置かれていた。今後も保護者の来校を抑えなくてはならないことが続くようなら、どの学校でも配信できるように区で補助するなどできないか。				
その他	おやじの会だけでなく、教職員だけでは手が足りないライン引き、来校者の誘導等の一役には、保護者（参観できる来校者に含まれない）が進んで手を挙げ、手伝っていた。				

【活動シート8】

活動名	下高井戸駅周辺地区街づくり協議会 しもたかGO 「明日のしもたか」 第1回2019年10月6日 第2回12月8日				
目的	京王線下高井戸駅の高架化によって、まちが大きく変わろうとしています。これからの下高井戸駅周辺の街作り提案を地域の人たちの意見を専門家も入り吸い上げ、深堀をする。テーマを持って街を歩き、下高井戸の魅力や課題、将来像について意見交換をする。				
関係性	協力		連携		協働
関係先	下高井戸商店街振興組合、北沢支所街づくり課、杉並区、日本大学、国士舘大学他、世田谷区立松沢小学校 京王電鉄、東急電鉄など電鉄会社				
支援内容	高架化の先の街の在り方を考えるための、ワークショップ、街の模型作り、場所の提供、興味ある人への声かけ、継続的なフォローなど				
キーパーソン	商店街組合理事・副理事等				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	ワークショップを通して、自分たちの街の現在とこれからをリアルに感じる事ができた。また、街に関わる様々な方たち、地域の方とも知り合うことができる場となっている。				
課題	幅広く地域住民に興味関心を持ってもらい、この企画を今後も継続して「住んでみたい街」「住んでいてよかった街」「ずっと住みたい街」を実現するための活気をどう作っていくのが課題。				
その他	駅の高架化でソフト、ハード面での様々な検討がされている。その中に、社会教育の視点を意識するとより充実した計画となるのではないかな。				

【活動シート 9】

活動名	乳幼児ふれあい事業「赤ちゃんを連れて学校へ行こう」				
目的	自分の子育てが始まる前に、赤ちゃんのお世話をしたことがなかったという、おとうさんおかあさんが約75%にもなるそうです。赤ちゃんを抱っこする体験と子育てのお話が聞けるチャンスをティーンエイジャーに経験してもらう				
関係性	協力		連携		協働
関係先	NPOせたがや子育てネット他 世田谷区立中学校 世田谷区子ども家庭課子ども子育て支援				
支援内容	中学3年生の家庭科の授業内に赤ちゃん授業ボランティアさん、保護者の方、サポーターの方に来てもらい、赤ちゃんを抱っこする体験、子育てのお話を聞く。				
キーパーソン	NPOせたがや子育てネット代表				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	初めは赤ちゃんに触れるのをためらっていた子どもたちも、安心して関わるできるようになり、また、実際の子育てのお話を聞くことでまちで赤ちゃんを連れての方への接し方を考えるようになったと、意識の変化もあった。				
課題	コロナ禍で活動ができない。				
その他	今年度は、はぐくみプロジェクトで松沢中学校で開催を予定していました。しかし、コロナ禍で活動することができませんでした。福祉的側面での認識でしたが、学校と地域の連携ということで紹介しました。				

【活動シート 10】

活動名	ウォークラリー（東深沢等々力地区）				
目的	東深沢等々力コミュニティが中心となり、地域・学校・PTA・家庭が連携して地域の「新しい」発見を通し、地域の絆を深める。				
関係性	協力	連携		協働	
関係先	東深沢等々力コミュニティ				
支援内容	事務負担（企画、運営、PR、安全管理等）				
キーパーソン	町会長、学校長、PTA、学校支援コーディネーター、学校運営委員等				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	地域・歴史・名所・防災拠点発見、顔見知りになる				
課題	コロナ禍により飲食の提供ができない。例年は、終了後の豚汁を囲んでの和やかなコミュニケーションが貴重。				
その他	東深沢小・中学校、等々力小学校児童生徒を中心に、子供たちの健全育成を願い、地域の人たちが集い、支え合い学び合う地域づくりをめざして平成4年12月に東深沢東深沢等々力コミュニティが発足した。				

【活動シート 1 1】

活動名	そしがや夏まつり				
目的	町会自治会や商店会や地域で活動している団体と、学校・保護者・子どもたちが顔と顔で繋がり、子どもたちが安全・安心な祖師谷でのびのびと健全に育ち、子どもたちにとって祖師谷が”心のふるさと”になること				
関係性	協力		連携		協働
関係先	祖師谷子ども健全育成の会				
支援内容	運営・事務・連絡全般（区の地域の絆連携活性化補助金活用）				
キーパーソン					
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	上記の目的で活動の1つとして始めた”夏まつり”は、年々協力団体も増え、会としての活動も広がり、地域で行われる事業や活動にも学校や保護者・子どもたちが参加しやすくなり相互の協力・交流の良い連鎖が生まれている。				
課題	活動を維持・発展させていくためには、事務局側の人員・人材の維持・確保が必要。				
その他	先生方も出店してくださり、子どもたちが学校生活以外に先生方と接することができる機会となっている。又、転任された先生方もいらしてくださり、卒業生たちにとってうれしい時間に。活動していく中での繋がりから”そしがやいろはかるた”の作製や”ヒマラヤ杉イルミネーションとキャンドルナイト”（学校70周年時に企画・実施）なども行うことができた。子どもたちだけでなく、卒業生や地域の人たちにも楽しんでもらえた。				

【活動シート 1 2】

活動名	地域のきずな実行委員会				
目的	地域のきずなを深める。				
関係性	協力	連携		協働	
関係先	世田谷区立烏山北小学校、消防署、国土舘大学				
支援内容	小学校低学年児童へのひな祭り行事（ひな飾りの展示、ひな菓子配布等）の開催、それに合わせた救急要請に関する知識や情報の提供、かけ算の学習状況の確認等。				
キーパーソン	学区在住の住民（学校運営委員会委員）				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	地域と学校、子どもたちにとって、地域の人びとや日本の伝統・文化（ひな祭り）等を認知するための一助となっている。				
課題	主体的に活動を行っている地域の人びとの高齢化に伴う労力的な負担や今後の活動の継続性。				
その他					

【活動シート13】

活動名	から北寺子屋				
目的	夏休み中に地域の方々の特技や趣味を活かした「遊び」や「学び」の機会を子どもたちへ提供				
関係性	協力	連携	協働		
関係先	世田谷区立烏山北小学校、同学校運営委員会				
支援内容	夏休み中に地域の方々がそれぞれの特技や趣味を活かした「遊び」や「学び」の機会を子どもたちへ提供している。				
キーパーソン	学校支援コーディネーター				
関係性の度合い	地域→→学校	地域→学校	地域⇄学校	地域←学校	地域←←学校
効果	夏休み中に相当数の子どもの参加があり、子どもたちの居場所の確保や学びの広がりにつながっている。				
課題	特技や趣味をもつ地域人材の発掘と確保。人材バンク（から来たドリームバンク）の活性化。				
その他					

(2) 意見交換

- 活動シート1～6に関して思うことは、関係性の度合いという点で、全部左側、つまり地域から何かしていただくということがどうしても多くなり、学校が何か地域に貢献できているとか、そういったものは実感を得にくいものであると再確認した次第である。
- 5、6に関しては、学校から働きかけて地域にお願いしているというのが発端か。
- 大体どこの学校も同じようなものがあると思う。
- 毎年持続させることが難しいケースもあると思うがいかがか。
- 6の「まちたんけん」は、地域の方がすごく積極的にご協力いただいているところである。例えば、会社などに訪問した時に、子どもたちの様子をその会社のホームページにアップしていいかということをお願いするなど、企業側の広告活動にも貢献している部分もある。
- これは地域が学校に協力しているという形になっているが、地域の人もやりがいであったり社会貢献の実績であったり、何か得るものはあるということでもいいのか。
- あると思う。補足だが、このような活動はいろいろなところで行われており、学校ではゲストティーチャーという呼び方をしているが、コロナの影響でできていな

いことが多いので、本来であればもっと事例を挙げることはできた。

- 活動シート7は、コロナ禍のため運動会を開催するにあたり、保護者には自宅からオンライン配信で応援いただき、おやじの会を中心に限られた保護者が積極的にお手伝いをするという事例である。
- 何かあったときに、おやじの会などの関係者が主体的に動いて、新しい対応策をつくっていくというのはすごく大切なことである。日常的につながっていないと急にコロナだからと言って、知らない人同士が協力し合うことはなかなか難しいと思う。
- 特におやじの会の人たちは、いろんな会社に勤めているので、いろんな特技を持っている人がたくさんいるので、いろんなことに対応できる団体だと思う。
- 活動シート8は、駅の高架化に伴う事例で、地域の商店街や電鉄会社などがワークショップをしたり話し合うという活動をしている。継続して行われているがキーパーソンがいるわけではない。だから、もっと住民が積極的に、特に関わっている人がもっとわくわく感や盛り上がるのが課題ではないかと思っている。
- 活動シート9は、赤ちゃんを連れて学校に行こうという活動である。今年度はコロナの影響により見送ったが、この活動は学校にとっても、子育てで大変な保護者にとっても、中学生の役に立っているんだということで、モチベーションも上がり相乗効果がある活動であるため、地域と学校の協働ではないかと思っている。
- 赤ちゃんをお持ちの保護者は、どのように集めているのか。
- 区のサイトやNPOせたがや子育てネットのホームページで募集をかけたり、自分たちみたいなつなぎ役をやっていただけの団体も手を挙げてくれて募集をしているので、結構集まるようである。
- 活動シート10は、30年ぐらいになる歴史の古い活動で、当時は中学校が荒れていた時期でその時の校長先生やPTA会長の発案で組織を立ち上げた。ウォークラリーとなっているが、フリーマーケットなどいろいろやって、子どもたちを何とかしようということから始まって、子どもたちの応援団という形で地域の人たちが絆を深めている。要は、大人が結構楽しんでいるというのが実情である。
- 学校はどうしても地域にお願いしますという一方通行になりがちであり、それがウィンウィンの関係になればいいが、結果的に子どもたちのため、学校のためにやることが、地域の大人の学習というか、つながりというか、そういうことが地域の大人たちのメリットになっているのではないか。
また、高齢化も進み若手がなかなか入ってこないというのが悩みであると聞いているが、やはり、やらなければならないと思うと長続きはしないが、結局はやりたい、楽しいというのが続いている一つの秘訣ではないか。
- 活動シート11は、この活動が始まって14年ぐらいになるが、やはり継続してい

くと、事務局側というか、今一番の課題は人材の確保である。効果では、学校の校庭や体育館を使用させていただき、そこでお祭りを行っているため、先生方もお店を出してくださるなど、いろんな方とつながりができている。そういうこともあって、学校側からも今度はこうしたいなどの提案があって関わりやすくなっている。

また、地域で行われている行事が活動などにも、保護者や子どもたちも参加してくれるなど、この活動を通して相互の協力や交流の連鎖が起きている。

- 相互連鎖ということだが、学校側に変化はあったか。
- 休日にもかかわらず先生がお店を出してくださった際に、顔にペインティングする先生がいたり、お祭りを通して学校生活以外に子どもたちとの接点を持てることや、また、転任された先生も遊びに来たりしてくれるので、在校生や卒業生との再会で交流ができるなど、顔がつながるというメリットはあると思う。
- 活動シート 12 は、地域のきずな実行委員会という活動であるが、自分が関わって7、8年になる。みずとみどりの会や豊かな老後を築く会が主催をしており、そのほかにも消防署や大学のゼミ生も参加しているが、ひな祭りに合わせた行事を行っている。コロナによって、今年はやり方を変えるが、子どもたちや地域の人たちにとって、日本の伝統文化などを認知するための一助となっている。課題はキーパーソンもそうだが、担い手の高齢化が進んでいるため、どう継続化していくかである。
- 活動シート 13 は、小学校の夏休み中の子どもたちのある意味居場所になるために学校を使わせていただいて、地域の方々がいろんな特技や趣味を生かした遊びや学びの機会を提供する活動である。私も今から十数年前から関わって驚いたのは、夏休み中に子どもがそんなに集まってくるのかと思ったが、毎日相当数の子どもが参加している。地域の方が協力して学校を使いながら子どもたちの居場所づくりは、これは保護者にとってもかなり助かっていると思う。そういう意味では、居場所の確保、学びの広がりなどにつながっているのも、とても有意義であると思う。
課題としては、地域人材の発掘、高齢化が進んでいる。私が学校運営委員長の時に「から北ドリームバンク」という人材バンクをつくったが、現状は少ない。まさにこういう活動は、人・物・金・時間で、それをどう作りだしていくかというところが今後の課題である。
- 話を伺う中で、活動自体は多様であり、単に協力をお願いしてやってもらって終わりではなく、それが長続きや発展したりするというのは、例えば立場の違う人としっかりつながるみたいなこと、あるいは一見やってあげている「から北バンク」の教える側の人も、自分の知っている趣味や特技を子どもに提供しているだけではなく、その瞬間に得ているものがあるのではないかと考えている。その形は非常に見えにくいのだが、だから、提供する中で得ているので、また来年へと継続するのではないかと。

- あと世田谷らしいと思ったのは、おやじの会は人材の宝庫で、確かにいろんな特技を持った方がおやじの会に所属している。実に多様でいろんなものを持っているが、そういう専門性をその地域の中で父親として発揮する機会ができると、その人にとっても活躍のきっかけにもなるし、学校から見たら宝の山のように感じるのではないか。
- つながり方が変わると起こることも変わるものなのか。地域の中で自分の能力を発揮すると、役割がどんどん多面化していき、しかも、祖師谷の事例のように、学校でお祭りをすると、学校の先生が先生以外の役割でその地域の中に入っていくきっかけが生まれたり、関係性がどんどん実体化していく。
- 割と共通しているのは、やらされているから、やらなければいけないというのが、楽しいからや好きだからが基本的なことで、どの事例でもそういう要素があるということを再確認できた。
- 協働が始まったり、活動が継続していくにはどういう要素があると思うか。
- 「おやまちプロジェクト」の高野氏も言っていたが、偶然を見逃さないこと、自分自身もいろんな活動に参加しているが、一緒にやっている人たちとの交流などの場がなく終了してしまうことがある。楽しかったり得るものはあるが、そこはもう一步、つながりや語る場などをつくることによって、広がりが出るし、声をかけてくれるとやってみようかしらという人もいると思うので、運営される方は、関わってくれそうな人を見逃さないで声をかけたり、語る場をつくったりするといいいのではないか。
- 子どもについて来る保護者にも声をかけるといいのではないか。保護者の方もいろんな悩みもあると思うし、話をする中で今までにないような活動や発想が出てくることもあるので、偶然を見逃さず語ることはすごく大切である。
- 最近、教育やまちづくりなので、地域組織の脈で、創発的なコミュニティというのがある。要は組織というのは、何をするのかがあらかじめ役割が決まっており、しっかり動かせるというのが組織的であるとされている。しかし、新しいことが起こるといのは、何をするのかが決まっていらないが、一旦、堅い構造化された組織から少し離れたところに人が集まり、そこでは自分のことを自分の言葉で語っていいという雰囲気があって、それを語ることでいろんなことがつながり直したりして、そこに集まった人が本当の地域課題や問題が特定されて、ではどうしようということが始まると、今までとは違う質のことを自分たちでつくっていけるということが起こる。絶えずいろんなことが起き、何がいつ生まれるかわからない状態だが、実はすごくイノベーティブのような議論もあったりするが、そういう要素が学校と地域の関係の中に生まれてくると、随分と違ってくるのではないか。

第2章 「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」に向けた方向性と方策の検討

「おやまちプロジェクト」や各委員の事例等を参考に、どの地域でも連携・協働するためにはどうしたらいいのか、また、阻害要因となっているものは何かなどをグループワークの手法を用いて、しくみについての整理と共有化を図るために、「地域グループ」「学校グループ」に分かれて2回のグループワークを通して検討した。

1 グループワーク①

(1) 地域グループ付箋図

		こういう学校に してほしいって 学校に言いたい 人事		ニュータウンは 世代がたよる 世田谷に入れか わっていい		
	校長の役割 の変化 公民館的な？	校長による		顔が見える 地域	学校は 世田谷区内にある	
	「どうも一緒にしな いと」というのは よくない それでは地域に あったりなかったら	地域による 町会運動会とか あったりなかったり	学校 誰かが知ってる 空間 (コミュニティの 核)	コミュニティの 核としての 学校への期待	学校には 安心安全がある	
			デパート + 児童館	学校がイキイキ = 地域がイキイキ	子ども元気 = 学校も元気！	
↑ こういう人は 見えない 無条件に受け入 れるわけにはいか ない	地域には いろんな人がいて クレーン言ったり 子どもに対する問 題行動			多世代が かわる機会		
					住み続けられる まちづくり	
		↑ 進学とかでは ないはず 教育観が 古いのでは？	これらの地域(社 会)に必要な人材を 学校に育ててほし い			そもそも何で やるのか？ 何を目標し てるのか？
		一緒に育てて いくことを 対話する 機会がある		↑ ↓ この地域で 子育てしたい 持続可能なまちへ	子どもは未来	
↑ みんなが関わる 新しい方法 が必要	お母さんらしい (女性の 社会進出)					
	学校は地域 互角でなくては コミュニティが主体	知り合いを どこでつくるか？				
		学校とつながる 前コミュニティが ないといけない				

(2) 学校グループ付箋図

祭りなど 地元との一体感が 得られる	学校は 地域活動の 拠点のひとつ	学校＝避難所 災害拠点	学校施設の公共 性（防災関係）		コロナにおいて 安全・安心の場			学校と地域が win-winの 関係を築く		
顔 つながりが増える	あいさつ運動	地域の人と 子どもが顔見知り になり安心感	地元の人が入る （知っている人） 安心感	安心 （つながり）	防犯 （見守り）	安全 （見守り）		〇大人が総がかり で子どもを育てる 〇キャリア教育の 充実 〇市民を育てる	地域への 帰属意識	
地域の協力がなしに は成立しない学習 内容が多くある	教員だけでは教え られないこと 経験など	地域人材の募集	学校の力と 地域の教育力 の活用	学校と地域 の両方 地域の財産 の活用		必要性だと考える （理由） 〇地域＝ 保護者とその背景 歴史経緯	卒業しても しばらくは居住 次の世代への 連続	地域との連携で 子どもたちが将来 地域の力となる		
	より広い 世界を知り機会 （子どもにとって）	教員の負担軽減		地域の高齢者 の立場から ＝生きがい （子どものため）		学校の敷居が高い （地域の立場とし て）	先生の多忙 （働き方改革）	小学校よりも中学 校には関わりにくい （頼まれごとが少な い）	継続性	
	地域の特性を生かすためには 地域の人の力が 必要		地域性を よく知っている		発想	時間 協力はしてもらって いるが貢献は…	先生と地域の 接点が少ない 時間が持てない		異動 3～6年で	
							時間	時間 （余裕）		

(3) 意見交換

○地域と学校が連携する効果・メリット

- ・「安全安心」というキーワードが出てきた。学校は、地域の方々にいていただけることで顔見知りになることができるので、防犯上も安全安心があるし、地域にとっても、災害時に学校が避難所として成立するということで安心感がある。
- ・高齢者にとっては、地域と学校が連携し自分が関わることで生きがいになっていて、それが安心感にもつながるのではないかな。
- ・地域の教育力が学校にすごく生かされている。
- ・子どもは地域の中で育っていくため、その連続性が保たれるとその子どもは地域の中で活躍していき、次世代の子どもたちを育てていくというところは、地域の教育力である。
- ・学校としては、地域とつながっていたい部分はある。やはり子どもたちは地域に戻っていくので、地域とうまくつながっていくということは大きいと思う。

○地域全体の目標

- ・子どもは未来だし、子どもが生き生きと育っているまちであれば、自分も子育てしたいと来る人もいるだろうし、そうすると人が増え、結局まちが持続的になるので、「住み続けられるまちづくり」という共通目標が必要ではないかな。
- ・ニュータウンであれば、同じ世代で固まってしまう場合があるが、そうではなくまちがいい状態になるために学校がすごく大切になってくるのではないかな。そうなれば、子どもから高齢者まで多世代の人が元気になる。

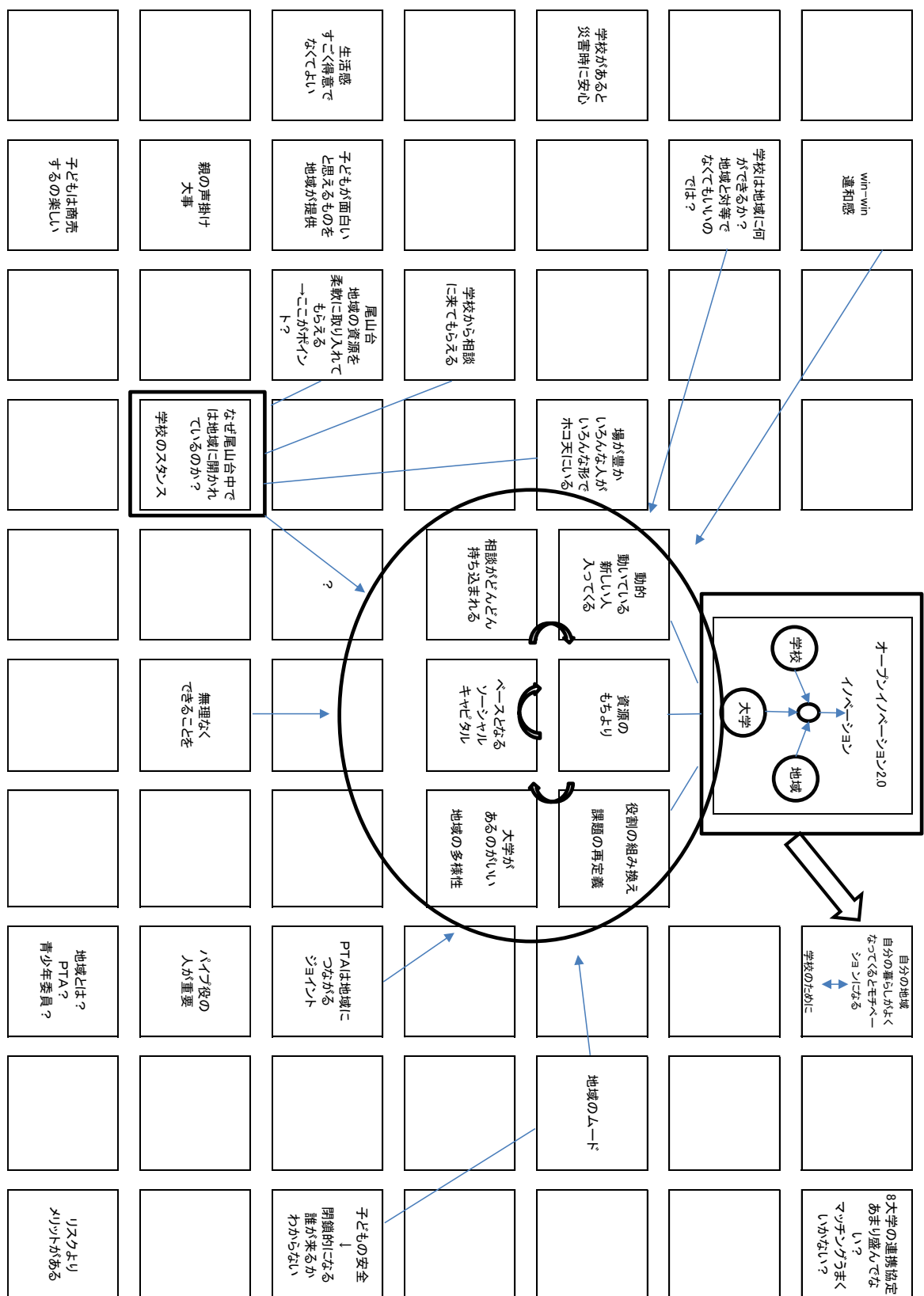
○現状の課題

- ・教員は多忙で時間的余裕がないことにより、学校と地域がどんなふうに関係していけばいいのか、学校はいつも地域のお世話になっているが、今の教育課程の中で地域にどのような貢献をしていけばいいのか、なかなか生み出す時間がない。
- ・地域の方はずっとそこにいるが、教員は異動してしまうのでそこでの連続性が保てないという弱さもある。
- ・ニュータウンであれば同じ世代で固まってしまう場合があるが、そうではなくまちがいい状態になるために学校がすごく大切になってくるのではないかな。そうなれば、子どもから高齢者まで多世代の人が元気になる（再掲）。
- ・そのためにはいい関係性がないといけない。顔が見えない関係の中でどんどんオープンにしてしまうと、クレームを言う人や子どもに対して問題行動を起こす人がいると危険な場合もある。その関係性をどうつくるかといったときに学校が期待されていて、先生に何かをしてほしいということではなく、学校は地域の真ん中であり、どこの地域にもあってみんなが知っている場所というのが、コミュニティの核になっていくことが地域から学校に対する期待なのではないかな。

- ・いろいろ難しさがあり一つはコミュニティの問題。地域の中で学校を核にしてみんなが関われるようにするためには、学校がコミュニティをつくるというよりも、そもそも地域の問題であって、地域に良好な関係性があるといいコミュニティがあると学校と関わることができるのではないか。しかし、その知り合いをどうやってつくるのかという難しさがある。
- ・もう一つは、地域にはいろいろな人がいるので難しいが、やはり顔見知りはどう増やしていくかということをやっていけないといけない。ただ、学校によってすごくオープンなところと、そうではないところがある。しかしそれがいけないというよりは学校のポリシーでもあるので、それも地域の資源の一つとして考えてみてはどうか。
- ・コミュニティのありようは地域ごとに全然違うので、その地域ごとのやり方でやっていくことが大切ではないか。どこも一律一様でこのようにしなければいけないでは、みんなが苦しくなってしまうのではないか。
- ・コロナによっていろいろなものが中止になったりなくなったたりしたが、なければならぬで済んでしまうけれども、コロナが収まったときに地域や学校が盛り上がっていけるように、細々とでもつながって動けるようになったときに、その活動が戻ってこられるようなしくみづくりが非常に大切なことだと思う。
- ・地域も学校も無理してはだめで、無理のないようにどうコーディネートしていくのが重要なのではないか。

(1) 地域グループ付箋図

(1) 地域グループ付箋図



(2) 学校グループ付箋図

あいさつ	保護者の意識		自ら主体的に		学校の役割 「地域の子」であり、 児童をしっかりと 教育することが連 携につながる	体育館や校庭な ど、場所の提供が 地域にとって重要		
あいさつ へんじは セット！	PTAの力 保護者と先生の コミュニケーション				保護者は地域の五 現在の保護者として 連携することが将来の地 域や学校の関係を深め ることになる	学校(先生)は地 域との連携を意識 する必要はない→ 目標は児童	中学生 避難所など	
他者意識	学校と地域の つながりは PTA				学校は地域で 求められる 社会性も教育して いくことが大切	学校教育に求める こと→社会性		学校の存在感
					学校の地道さ			
	町会 商店街	町会						

(3) 意見交換

○地域と学校をつなぐ存在

- ・学校と地域のウィンウィンの関係を考えたときに、小学校中学校の差はあるが、やはり小学校のほうがそれを感じやすい。例えば、「まちたんけん」などの教育活動には地域の人たちの協力が必要不可欠である。その際に、キーパーソンとなるのが学校支援コーディネーターや学校運営委員などである。

- ・学校と地域の連携をする上で欠かせないのがPTAの存在である。学校支援コーディネーターや青少年委員、地区委員などの存在も必要だが、そのほとんどがPTAの経験者でそういう意味では、学校と地域をつなぐ存在として両者の関係を次に伝えていく存在としてもPTAは非常に重要な組織である。

- ・地域を支える町会やその他にもいろいろな方が活躍しているが、結局はPTAの経験者ということが大きいので、現役のPTAをしっかり支えることが大切である。逆にPTAが活発な学校ほど地域も協力してくれるところが多いと感じている。

- ・PTAは、学校と地域をつなぐ一番の大きな要素で、ジョインターとしては非常に重要な要素である。「アフターPTA」ではないが、地域で活動している人は大体はPTA経験者である。

- ・PTAの人材がどんどん育っていった、PTAを離れた時に力を発揮されているというのは本当にその通りだと思う。

- ・地域の中心が学校というのは全くいいのだが、影の主演としてまちづくりセンターがある。我々がPTAの経験者として活動しているときに、まちづくりセンターを経由していろいろなことをやっている。一見単なる区役所の出先機関だが、地域にとっては何でも相談できて、いろいろな団体の中継地点にもなっているので、区としても外せないのではないかと考えている。

○オープンイノベーションという考え方

- ・ウィンウィンというのも少し違和感があるのではということで、「オープンイノベーション」の事例を紹介した。これは、何か新しいものをつくるときに、学校だったら学校の中だけで新しいことをやるというのが、これまでのやり方だったが、オープンイノベーションという考え方は、自分の中の資源だけではできないから、他のものを借りてきてつくるということだが、それもすぐに限界があることが分かった。それは他の力を借りて自分だけ得しようとする、そんなにいいことは起こらない。ヨーロッパを中心にオープンイノベーション 2.0 のフレームワークが大切だと言われ、平たく言えば、地域の力を使って学校をよくするとかではなく、地域と学校といろいろな人が協力して社会をよくするというフレームワークが大切であるということである。

- ・おやまちプロジェクトを振り返ってみれば、単に学校だけができることでもなく、

事業者だけができることでもなく、みんなが自分の持っている資源を持ち寄ること
で資源のつながり方が変わって、それぞれの役割が再定義され、役割の組み換えが
起こって、結果的に学校の中でもこれまでできなかった授業ができるし、子どもに
も大学生にもメリットがあったり、地域の事業者も自分たちが持っているものがま
さか中学生に役立ててもらえるとは思ってもいなかったし、中学生がつくったもの
が自分のところの商売にも使えるということが起こっているということを見ると、
ウィンウィンの関係でもないのでは、というほうが腑に落ちるのではないかという
話になった。

- ・オープンイノベーションが起こるには何が必要なのかと考えると、基本的にはベ
ースとなるソーシャルキャピタルといって、顔が見える関係性がないとだめで、見
える関係性が固定的でもだめで、絶えず新しい人が入ってきてくれるとか、動いて
いることが大切である。そうすると、そこにいろんな相談が持ち込まれて、いろん
な人が絶えず出入りをしていると、これまでにない解決の仕方がたまたま生まれる
可能性があるので、こういうことが大切ではないか。

- ・学校のために何か力になりたいみたいに考えると限定されてしまうが、地域がど
んどん良くなってほしいとか、自分の暮らしがどんどん良くなったらいいし、その
ために自分は何ができるのだろうかというマインドでみんなが持ち寄ると、みんな
のモチベーションになり、結果的に地域がよくなって学校もよくなるという構図な
のではないか。

- ・オープンイノベーションは、自分の所属のところだけで完結するのではなく、新
しいほかの要素を入れる。それもやはり人である。どういう人がそれにあたるのか
は地域での中で検討していくことになるが、それが一つの焦点になるのではないか。
これは 1.0 から 2.0 という、恐らく今の尾山台地域は 2.0 の指標なのかと、これに
どこまでほかの地域が近づけるかというのが大きな課題ではないか。そのポイント
はやはり P T A ではないかと感じている。

○現状の課題

- ・比較的若い保護者や先生の意識によって、つながりというものに必要性を感じな
くなっているような世代もいるのではないか。それを解決していくには、まず挨拶
や声をかけることが非常に大切ではないか。

- ・保護者の意識をどのように変えるかという課題だが、少しハードルを高く見てい
るのではないか。P T A とか地域活動も含め、P T A の経験者やベテランの先生が、
できることからやればいいんだとか、失敗してもいいんだよということを伝えてい
くのが必要ではないか。

- ・世田谷区は町会がちゃんと存続している地域なので、お祭りや盆踊りなど町会で
はいろいろやってくれるのだが、保護者にあたる人はイベントに参加はしても、町

会の会員にはならないと町会の人から聞いている。例えば、PTAだよりなどで、町会のイベントで子どもたちが楽しませてもらっているとか、町会は地域のためにこんなことをやっているなどを紹介できるのではないか。そういうことで、みんなが町会に加入することでまちづくりが活性化するのではないか。

- ・小学校のことばかり話をしていたが、言われてみれば、高校や大学との連携という観点もあると感じた。

- ・結局大学も多様なファクターの一つで、学校が中心でもいいのだが、要は地域のいろいろな人たちが関わりあえるという状況が重要で、大学はその要素で、地域の多様性みたいなものが大切ではないか。

- ・オープンイノベーションは、自分の所属のところだけで完結するのではなく、新しいほかの要素を入れる。それもやはり人である。どういう人がそれにあたるのかは地域での中で検討していくことになるが、それが一つの焦点になるのではないか。これは 1.0 から 2.0 という、恐らく今の尾山台地域は 2.0 の指標なのかと、これにどこまでほかの地域が近づけるかというのが大きな課題ではないか。そのポイントはやはり PTA ではないかと感じている（再掲）。

- ・新たな連携・協働のしくみづくりに向けた課題を考えたとき、連携・協働というと、例えば A と B があってこの二つが連携したり協働したりという形だと思うが、そもそも学校と地域はそういう関係ではないのではないか。学校も地域の中の一つなので、学校も含めこの地域にいるみんなが幸せになるために、それぞれの立場で何をしたらいいのかというのを考えたほうがいいのではないか。連携・協働という言葉を一回頭から外したほうがいいのではないかという気がしている。

- ・要は地域のいろいろな人との連携がやはり大切で、PTA の役割はすごく大きいし、町会もいろいろな役割がある。ただ、連携・協働と言ってしまうと結構固定的になってしまうし、学校と地域の構造自体が違うので、それを一回解体してみて、地域がよくなるためにその人たちがそれぞれどういう役割を果たしていこうかということが、新しい組替えも含めて起こっていくというふうに考えたほうが物事よく見えるし、可能性も見えるのではないか。あとは、どうなったらそうなるのか、そのために必要なものは何か、どのようにしたら少しでもそのようになっていくのかなどが課題ではないか。

- ・どういう未来をつくりたいのかなど、地域の中で目指すところを明確にしておくと、何のためにそれをしていくのかが見えてくるので、例えば「安心して住み続けたいまちづくり」というところが必要だと思うがいかがか。

- ・地域という概念をどう捉えるかは学校種によっても大分違ってくる。これまでは地縁的なつながりだと思うが、目指すところが一緒という意味では、志なり、支援的なつながりなわけだから、地縁ももちろん大切ではあるが、目指すところは一緒

だよねというところでのつながりをどうつくり出していくのかが課題なのではないか。そういう意味では、学校が一つの物理的な空間というか、やはり核になる。学校発信でPTAがあって町会と結びついていて、そして各人たちを結んでいるということから、本当にネットワークの拠点ではないかと思っている。

第3章 「地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみ」の具現化

1 課題抽出・整理

2回のグループワークを通じ、学校を含めたどの地域でも可能となり得る、連携・協働の新たなしくみを具現化するために、「連携・協働する意味や必要性とはなにか」、「連携・協働のメリットとは」、「地域と学校をつなぐ存在とは」、「連携・協働のデメリットと阻害要因とはなにか」、「地域と学校は対等でなければならないのか」の5つの課題を抽出し、整理した。

(1) 連携・協働する意味や必要性とは何か

- そもそも何で連携とか協働をするのか、それによって得られることは何か、成し遂げたいことはいったい何か、また誰が得をし、誰がいいなと思うのか、さらにはどういう未来をつくりたいのかなどをもう少し考えたほうがいいのか。
- 地域と学校の協力、連携、つながりといっても、様々な水準があるのではないかな。つながっていたとしても、協力というのは実はそこかしこで何かしら協力しあっているということは起こっている。それが何か一緒に連携してやっていくという段階。一方、地域と学校が一緒になって一步踏み出さない限りは起こらないこともあるので、その関わりの深度というのは実はいろいろあるのではないかなという気がする。
- やはり子どもたちのため、学校のためということで、学校がどうしても地域にお願いするというかたちになりがちだが、「おやまちプロジェクト」もそうだが、結果的に子どもたちのため、学校のためにやるのが、実は地域の大人の学習というか、学びへとつながるため、地域にとってもメリットになるのではないかな。
- あいさつ運動は、非常に地域と学校が協力して行っている活動の一つではないかな。
- 連携する意味としては、多世代交流がある。子どもは未来だし、地域の財産でもある。だから、学校や地域だけで達成することができない。連携によって、学校と地域の両方が活性化され生き生きすることにつながる。それには「信頼関係」や「安全安心」がキーワードになるのではないかな。
- 「おやまちプロジェクト」が目指しているところは、尾山台の暮らしをもっと豊かにしていくために、課題解決ではないアプローチで楽しんでいくということだった。そして、活動の中で偶然の出会いや偶然にあったことを逃さない、そこが大切であると話され、そこがヒントだと思った。
- 現場で気づいたことをもとに人と人がつながって、行動した気づき、そのサイクルの中で必要なことがあれば人に尋ね、まちの人とどんどん展開してうまくいかないことがあっても、継続ができ様々な形でつながりあっているというのが印象的

だ。

- すごく重要なポイントだと思う。どうしても困っている人を助けるとか、課題を解決するために、目的・目標を決めてからやろうというのが一般的なこれまでの市民活動、地域活動だったと思うが、「おやまちプロジェクト」の場合は、むしろ何かやってみて起こることをしっかり振り返り、次につなげていくというような進め方がいいのではないかな。
- 立場が違っていても思いが共有できて、何か一緒にやろうという関係性ができれば、立場、組織、領域を横断して様々なことが動かしていけるのではないかな。それが起きにくいのは、立場が違う人とあまり会う機会がないとか、あったとしてもなかなか思いは聞けない。そういうしくみができるのと加速されるのではないかな。
- 連携・協働の必要性を考えると、「住み続けられるまちづくり」という大きな目標のようなことが大切で、子どもは未来であり、子どもが生き生きと育っているまちならば、自分も子育てしたいという人も来るだろうし、人口増にもつながる。結果、持続的なまちとなり、まちがいい状態になるのではないかな。

(2) 連携・協働のメリットとは

- 自分のいる地域は、高齢化率が高いので、子どもの元気な成長などが寝たきりの高齢者を増やさないことにもつながるので、大人も元気でいられる。それだけでもメリットがあるのではないかな。
- やはり子どもたちのため、学校のためということで、学校がどうしても地域にお願いするということになりがちだが、「おやまちプロジェクト」もそうだが、結果的に子どもたちのため、学校のためにやることが、実は地域の大人の学習というか、学びへとつながるため、地域にとってもメリットになるのではないかな（再掲）。
- 地域のメリットとしては、学校が災害拠点の避難所になる。
- 「安全安心」で言えば、地域の大人が協力し合える体制をつくっても、地震などの有事の際に地域にいて活躍できるのは、公立の中学生である。
- 自分も高齢者の代表として考えれば、高齢者の生きがいの一つが、子どものためという意欲のモチベーションになる。
- 学校のメリットでは、地域の教育力の活用である。世田谷は地域の教育力が潜在し、ポテンシャルも大きい。夏休みなどでのゲストティーチャーがそうだ。これは、地域と学校の両方のメリットにもなると思うが、地域の教育力の活用は、地域財産の活用ということができるのではないかな。
- 学校の先生だけでは教えられないこともあるので、それは様々な経験を積んでいる地域の方の力が必要である。
- 地域の人と子どもが、学校を介して知り合いになる、顔見知りになるということ

で、お互いにとっての安心感につながると思う。

- 子どもたちにとって地域はやはり故郷になるので、地域の人と関わったとか、自分が地域のことを何かやったということは、将来的に子どもたちが地域の力になる、地域に戻ってくるということにつながればと思っている。
- 小学校の場合、地域の協力なしには成立しないと思っている。まち探検や地域めぐりなどの学習内容では、ボランティアで安全確保をしていただいたり、家庭科のミシンを使う授業では、学習サポーターのような形で保護者や地域の方にお手伝いをいただき、教員の負担軽減にもつながるため、協力をいただかないと難しい。
- 小学校6年、中学校3年、卒業してもしばらくはその地域に住むので、次世代に何かいろんなことを連続させていく必要があると思っている。
- 子どもが学校に来ているということを考えると、子どもが住んでいるその家の集まりというか、その一帯なので、子どもの背景にある保護者と、そのまた背景にある地域、それから歴史的ないろんな経緯も含めて、この子どもたちが今ここにあるのは地域がずっと昔からあるからだと思っている。
- 一番大きな効果は、大人総がかりで子どもを育てていることになるので、キャリア教育の充実とか、市民教育みたいなよい市民をつくるようなものがあると思っている。
- 地域との連携の効果としては、時代を超えた教育の連続性というか、教員が代わっても地域がどんとあると、地域の特性というのも関係すると思うが、連続性が保てるのではないかと思う。

(3) 地域と学校をつなぐ存在とは

- 小学校との連携というのは非常に重要になってくるが、「おやまちプロジェクト」でもあったが、裾野を広げるためにはどのような取り組みが必要なのか。例えば学校で何かするにしても、多分いろいろと地域学習とか、そういうものを考えるにしても、何かきっかけがないと難しいので、そうしたときに誰がキーパーソンになるべきか。
- 古くから地域に住んでいるのでいろいろな地域の方を知っているが、こういうことをやりたいというときにお願いに上がる際は、学校支援コーディネーターである。その他、学校運営委員やお子さんが卒業した地域の保護者、元PTAの役員たちに声をかけたりしている。
- 例えば地域学習をするときに学校から見て、まず学校支援コーディネーターさんに相談するのか。
- 一つの例で言うと、2年生がまち探検をやっている。いろいろな商店なり、施設なりと関わっていきなさいいけないというときに、学校支援コーディネーターの方

に間に入ってもらっている。その際、グループに分かれて見学に行ったりするが、そのグループの子どもたちを引率のお手伝いで保護者を頼んだときに、この保護者を束ねてこのようにやってくださいと説明するのを学校支援コーディネーターの方をお願いしたりというような形で、やっているところである。

- 地域と学校の連携は、担い手としてPTAや学校運営委員、そのほかにも学校支援コーディネーターなどの人に任せればいいので、先生たちは子どもの方を向いていけばいいのではないかな。
- 学校が地道に子どもの教育を行い、それによって地域の人もその姿を見て安心し、地域の方が学校教育活動の一環で関わることで顔見知りも増える。それゆえ、やはり学校支援コーディネーターをはじめ、学校運営委員、卒業したPTA経験者などの位置づけは大きいと思う。
- 地域も学校や子どもへのアプローチを考えたときに、そのきっかけがつかめない場合がある。そういう時にPTAが、地域と学校をつなぐ人がいるとそこから広げていけたりできるし、安心感も生まれる。
- PTAの方は、子どもが小中学校を卒業した後も、地域にかかわることも多い。今、自治会の役員をやっているが、PTAの役員をされた方に自治会の活動を手伝ってほしいというつながりから、現在一緒に役員をその方としている。
- そういう意味ではPTAは地域と学校とのジョインターである。
- 自治会に入っていないPTAは多いが、顔見知りであるので、そういうところの接点があったことをきっかけに後から入ってくれる方もいるので、PTAだけではなく地域からもジョインターがいた方がより強固にできると思う。
- そういう面から見た地域とのつながりは大きいと思う。例えば運動会の活動など、学校行事としてつながる場合もあるし、スポーツ大会や福祉活動など、イベントを一つのきっかけにしていくことが大切。
- 連携するうえで、学校支援コーディネーター、青少年委員、地区委員などの存在は非常に重要な存在であるが、ほとんどがPTAの経験者であるため、学校と地域をつなぐ存在として、またその関係を次に伝えていく存在としてPTAという組織が非常に重要である。
- 地域を支えている町会など、地域で活躍をしている人は結局、PTAの経験者ということが大きいので、現役のPTAをしっかり支えることが大切である。PTAが活発な学校ほど地域も協力的であるということを感じている。
- PTAが学校と地域の連携の中で一つ大きな役割を果たしていくという中で、学校は今行っている教育を地道にしっかり行っていくことが重要であることに加え、目の前にいる保護者と教員がしっかり連携していくことが将来にわたって学校と地域が深いつながりを保つことになるのではないかな。

- 世田谷区は町会がしっかり存続しているので、地域のお祭りや盆踊りなどいろいろやってくれるが、保護者は参加はしても町会の会員にならない。町会にみんなが加入してくれれば、世田谷区自体が、大きな意味ではまちづくりが活性化するのではないか。
- P T Aで人材がどんどん育っていき、P T Aを離れたときに地域で力を発揮されているというのは本当にその通りである。

(4) 連携・協働のデメリットと阻害要因とは何か

- 「信頼関係」「安全安心」というキーワードが上がっていたが、地域と学校の連携・協働を考える際に、ある程度の条件というかそういう人たちが学校に入っていけばいいが、もしかしたら問題行動を起こしかねない人もいるので、無条件で誰でもいいというわけではないと思う（再掲）。
- 学校に協力する人を地域で広く求めたいと思っても、そこはやはり地域でもある程度つながりがあって信頼関係のある人ならいいが、よく知らない人だと心配はある。顔の見える関係が広がっていけばいいのだが。
- コミュニティの問題があって、地域の中で学校を核にしてみんなが関われるようになるためには、学校がコミュニティをつくるというよりも、そもそも地域の問題であって、地域に良好な関係性があれば学校と関わることはできるのではないかな。では、その知り合いをどうつくっていくのが課題。
- コミュニティで何かを行う場合の最低限なルールづくりというか、そこに参加する人たちの共通理解ができるようなルールづくりが必要なのではないか。
- 基本構造として学校中心で考えると、学校のルールがわかる人以外は入れない。この問題を乗り越えられるかどうかは、学校以前に地域にそういうつながりがあるかどうかということではないか。
- 今、コロナの影響で学校は一変した。コロナが2年続き、地域の関わりが全くない。それでも学校としてはやれてしまう。いろんな意味で学校を変えてしまったが、それでも地域の人材がほしいと思っているし、特に知っている方であれば安心は抜群である。
- 連携・協働は貸し借りになっていないか。
- 地域にやってもらったら、学校側も返さなければいけないのか、対等にする必要が本当にあるのか、学校は学校のやり方があるのではないかな。
- 学校の先生は多忙で余裕がない。担任を持っている先生と地域の人との接点は時間的にも難しく持てないのが現実ではないか。
- こうした現状の中で、学校と地域がどんなふうに連携していけばいいのか。学校はいつも地域にお世話になっているが、今の教育課程の中で学校が地域にどんなふ

うに貢献していったらいいかということを生み出す時間がなかなかないのではない
か。

- 地域の方はずっとそこにいるが、教員は3年から6年くらいで異動してしまうので、そこでの連続性が保てないという弱さがある。そのような状況の中で、何かしら工夫をして連携が図れるようにしていくことが大きな課題である。
- 学校側としては、授業が本務のためしっかりやるようにという校長と、地域にもどんどん出て行き地域貢献していこうという校長と、特に小学校の場合は、両方言いたいところは事実である。ただ、学校の中では働き方改革が大きな課題になっているため、地域にどんどん行くようにとは言い難いところが本音である。
- 中学校の場合、部活動が土日もあるので地域とのつながりがなかなか難しい面があるが、地域とつながっていたい部分がある。やはり子どもたちは地元に戻ってくるため、地元とうまくつながっていくということは大きいと思うし、そのために何とかそうしていきたいと考えている。
- どうしたら先生方が地域のほうに向いていただけるのかというところを考えていく必要があると思う。小学校と中学校では立ち位置や状況が違うところは加味していかなければならないと思う。
- コロナの影響によって、いろんなものが中止になったりして、関わることもなくなってしまったが、なければならぬで済んでしまう。ただ、コロナが収まったときに地域と学校が共に盛り上がっていくためには、なかなか難しいが細々とでもつながり、自由に動けるようになったときにその活動が戻ってこられるようなしくみづくりが非常に大切ではないか。

(5) 地域と学校は対等でなければならないのか

- 連携・協働は貸し借りになっていないか（再掲）。
- 地域にやってもらったら、学校側も返さなければいけないのか、対等にする必要が本当にあるのか、学校は学校のやり方があるのではないか（再掲）。
- 学校の先生は多忙で余裕がない。担任を持っている先生と地域の人との接点は時間的にも難しく持てないのが現実ではないか（再掲）。
- ウィンウィンの関係もあるが、学校が地域を支えるというのは、地域と同じように互角にというのは難しいことだと思う。ウィンウィンの関係でも地域のウィンが大きくてもいいのではないか。
- 要するに学校は、子どもたちの教育が本来業務であって、地域と関わることで著しく阻害するようなことがあっては本末転倒。そういう意味では、発揮できないきは言っていた方がいいのではないか。
- 地域から学校に対する期待というのは、誰もが知っている場所だし、何かをする

にしても学校の施設を使わせてもらうことによって、コミュニティや様々な活動が実現できるので、空間としてあるだけでいい。

- 学校の先生の役割だが、先生それぞれの考え方があるため、一律にこうすべきというよりは、先生方の考えを尊重して地域が関わる方がいいのではないかな。
- ウィンウィンの関係をどう考えればいいのか。
- 地域によっても状況が違うので、どこも全く同じように関わりを持たなければいけないということもないと思う。そこは必ずしも対等ではなく、相互に協力・連携・協働ができる要素が少しでもあれば対等である必要はないと思う。
- やはり地域のムードというか、「おやまちプロジェクト」をもとにした雰囲気やムードが出来上がっていくと学校にもアプローチしやすいのではないかな。
- 学校の存在そのものが地域に役に立っているのだから、それほど意識しなくてもいいのではないかな。
- 地域と学校の連携は、担い手としてPTAや学校運営委員、そのほかにも学校支援コーディネーターなどの人に任せればいいのか、先生たちは子どもの方を向いていけばいいのではないかな（再掲）。
- 学校はやっていただくことばかりで申し訳ないと話をすると、子どもたちの元気な姿を見られるだけでいいんだよと言っていたところもある。地域との連携で考えると、学校はその地域の子どもたちを預かっているのだから、子どもたちの教育を全力で携わっていくことが地域への貢献になるのかと考え始めている。
- エポックメイキングのように、地域に対して何かをしようというよりも、本当に地道に子どもをしっかりと育てることが地域連携になると思う。
- それに加え、地域の方々にフランクに思いを伝えていくことで、今何が求められているのか、両者が何をしているのかという情報をきちんと伝え合うことができれば、それがウィンウィンの関係につながっていくのではないかな。
- 安全安心というキーワードが出たが、学校は地域の方にいていただけることで顔見知りになることができるので、防犯上も安全安心が保たれる。一方、地域の方にとって災害の時に学校が避難所として成立するということで安心感がある。高齢者と子どもが関わることで学校と連携することが生きがいにつながっており、これも安心感になる。地域の教育力が学校にすごく生かされているということであるが、ウィンウィンの関係は、両者の力の大きさではなく、このような関係性を持ち続けることで両者にメリットがあることがウィンウィンの関係であって対等である必要はないのではないかな。

2 一提言一地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみづくりに向けて

「おやまちプロジェクト」の取り組みは、一見、特殊な例と思われがちだが、決してそうではなく、むしろその地域にかかわる個人の「やってみたい」という一つの想いをきっかけに、この指とまれ形式のように賛同者が集い、新たなプロジェクトへと発展していつている。したがって、決して特殊な例ではなく、どの地域でも同様の取り組みが可能はなすである。しかしそのためには、「やってみたい」という個人の想いを発信したり共有できる場の整備が重要である。そして、このような場を提供し、個人の思いだけにとどまらず、地域にある資源を有機的に紡ぐ、ジョインターの存在は欠かせない。このように、どの地域でもそこにある資源を有機的に組み合わせることで、新たな連携・協働が可能となろう。さらに、このような流れをつくるには、「誰もが安心してられるまち（づくり）」という地域全体の共有目標を掲げることが重要である。これらを踏まえたうえで、以下の3つの方策を循環させることで、従来にはない持続可能な連携・協働のしくみが構築されるのではないかと結論づけた。

(1) 方策1 連携に必要なジョインターの育成とネットワーク化

連携に必要な「ジョインター」とは、例えば、学校と地域をつなぐパイプ役のことである。現在、主なジョインターは、町会や商店街の役員、学校支援コーディネーターや学校運営委員、青少年委員や地区委員、そのほかにも民生・児童委員などが挙げられる。しかし、近年では、これらのなり手が減少傾向にあることと、個々での活動にとどまり、ネットワーク化されていない地域も見受けられる。そのため、今後はいかにジョインターとなり得る人材を育成し、ジョインター相互をネットワーク化するかが重要である。

方策案①地域の各種イベント等にPTA（保護者）が無理なく参加して後継者が育つようなしくみづくり

現在の主なジョインターは、そもそも子どもが通っていた保護者であり、ジョインターの多くがPTAの役員経験者である。こうして見れば、地域には現役のPTAやPTA経験者の集まりといっても過言ではないし、人材の宝庫といえることができる。

しかしながら、人材の宝庫といえることができても、その宝を生かしきれず、同一のPTA経験者がいくつもの肩書を持って活動するという地域は少なくはない。

こうしたことから、現役のPTAの保護者であるときから、地域の様々なイベント等に参加、参画して、ジョインターと関わることで、顔見知りとなり、ジョインターの役割を理解することもできるため、そのような流れの中で後継者として育つ環境を整えることが大切である。

○ 人のつながりをしっかり持つことが大切な要素

・現役のPTAの人にいきなり地域活動に参加するように声をかけても、日頃あまり地域との接点がないと負担感ばかりが大きいのしかかるため、例えば、地区委員になられたPTAの人に声をかけてお手伝いをしてもらおう。このような関係を積み重ねる中で、地域活動の必要性や課題等を把握し、地域活動の面白さややり甲斐等を育むことができる。

・地域の側も学校や子どものためにいろいろお手伝いをしたいと思っても、そのきっかけをつかめない場合がある。そのような時に、ジョインターとPTAとの接点があると、そこから広げたりすることができる。また、顔見知りのつなぎ役やパイプ役などの人がいると安心感もあるのでよりつながりやすくなる。

○ 学校行事や地域行事への参加・参画

PTAの役員や委員長以外の多くの保護者は、地域との接点が少ないため、まずは身近な学校行事の運動会や学芸会などのお手伝いから始め、徐々に地域行事のスポーツ大会や福祉活動等に参加・参画してもらうことがジョインター育成への近道である。

○ まちの商店と小中学生とのコラボ企画から保護者を取り込む

例えば、まちのある商店と小中学生がコラボして、一日店長や販売体験等を行えば、そこに関わる子どもの保護者はその様子を見学しに来ることが予想できる。そうなれば、子どもの体験から親子のコミュニケーションにもつながるばかりか、保護者も地域への関心も高まるはずである。このような企画を繰り返し行うことで、お客さんの立場で来ていた保護者が地域活動へ参画するきっかけになるかもしれない。それが重要である。

方策案②ワークショップやシンポジウムの開催

地域は人材の宝庫ではあるが、多くの人材が地域のために何かをやりたいという思いを持ち合わせているかといえば必ずしもそうではないかもしれない。しかし、何かの機会や場によって触発され、自分にもできるかもしれないという気にさせることは、可能かもしれない。そこで、まずは地域ごとの学校支援コーディネーターや青少年委員などの企画により、地域のジョインターや現役のPTAなどで興味関心のありそうな人を対象に、地域に愛着を持ち、自分も何かやってみたくなるようなワークショップやシンポジウムを開催し、地域をよくしたい人の組織化を図る。

○ 社会教育委員の会議主催によるシンポジウム等の開催

・地域のジョインターの担い手不足が課題ではあるが、現在、地域には多くのジョインターが活動している。そして、今よりもっと地域をよくしたいと思っているジョインターは必ずいるはずである。ただ、いくつもの肩書を兼務している人も多い。また、

具体的にどのようにしたらよいのかわからずにいる人もいるのではないか。そこで、これまでの調査・研究を活かして社会教育委員の会議や社会教育主事の主催でシンポジウムを開催し、「おやまちプロジェクト」をはじめ、区内の成功事例やジョインター相互の意見交換・交流の機会と場であるとか、国立や私立の学校に子どもが通っている保護者やこれまであまり地域と関わりが少なかった方などを対象に、楽しいまちづくりの提案やわくわくするようなワークショップを企画し、そこに集まった人を新たなジョインターとしてスカウトしていくような機会と場を設定するなども、ジョインターの育成と確保につながるため大切である。

○ 地域のジョインターによる開催

社会教育委員の会議主催のシンポジウム等がヒントとなり、次は地域のジョインターとなる人たちによる開催を行う。例えば、開催報告書を作成し、5つの支所単位のまちづくりセンターに配布したり、地域への回覧を依頼する。

○ 支所単位でのワークショップの開催

地域のジョインターによる開催がどの地域でも軌道に乗り開催するようになれば、支所単位で地域のジョインターが持ち回りでワークショップを開催し、ジョインター相互の意見交換をはじめ、ネットワークの構築につながる。このような動きになれば、常に情報交換ができるとともに、隣の地域を意識することにもなるため、よりよい相乗効果が生じる。

○ 地域全体の共有目標を示す

ワークショップやシンポジウム等が開催され、地域をよくしたいという意識づけが広がっていくには、地域で受け入れるというムードや雰囲気をつくる下地が重要である。そのためにも、「誰もが安心していられるまち」という地域全体の共有目標を掲げることが大切である。

(2) 方策2 誰もが参加できる環境整備

「(方策1 方策案②) 地域をよくしたい人の組織化」は、地域のために組織的に行動を起こすことができる人たちの集まりである。

地域に住んでいる多くの人には、自分が地域のために何かをやろうという思いはなくても、せつかくこの地域に住んでいるので、もっと住んでいる地域がよくなったり、今よりももっと豊かな生活になったらいいなという思いは、誰もが持っている感情である。このような思いの感情は、地域の愛着心を育むきっかけにつながるため、その地域に居住している人だけではなく、地域に通学や通勤している人も含め、誰もが気軽に参加でき、地域への思いを発信できるような環境の整備が重要である。

方策案①「地域の未来を考える会（仮称）」の開催

現在、区立小中学校には、学校と地域の連携組織で児童・生徒の健全育成、地域防災・防犯、教育活動の充実を目的として設置され、地域への情報発信の場、地域の総会的な場としての学校協議会がある。この組織を活用して「地域の未来を考える会（仮称）」を開催する。考える会では、その地域に長年住んでいる高齢者の方から、地域の成り立ちや変遷などの話を伺ったり、また、自分のいる地域の 30 年後、50 年後の未来がどうあるべきかなどを多世代で話し合う。こうすることによって、参加する全員が、より地域への思いが強くなるばかりでなく、実は「みんなこの地域が好きなんだ」ということに気づくことができる。このように、はじめのうちに、地域に関わる人の多くの思いというベクトルの向きを同方向にするような仕掛けは、何かを始める原動力にもなるはずである。

○ 地域やまちの歴史に詳しい高齢者（人）の発掘

これからの未来や将来を語る前に、これまで自分が住んでいる地域やまちがどのように移り変わっていたかを知る必要がある。そのためには地域やまちの変遷を詳しく語れる高齢者や企業（鉄道関係者など）の方を発掘することが大切である。

○ 小中学生に地域の未来を想像させる

地域やまちに詳しい人に依頼し、道德の時間や総合の時間等を使い、小中学生に自分の住んでいる地域やまちの 30 年後、50 年後を想像し作文させる。この作文を学校のほかに、まちづくりセンターや図書館、商店等に置かせてもらい、保護者以外の様々な世代の人の目に触れられるように、地域やまちへの意識を高める仕掛けを行っていく。

○ 地域を想う実感・共感が地域をつなげる

上記のようなアプローチをしたうえで、地域のジョインターが「地域の未来を考える会（仮称）」を開催する。開催することで、参加者の多くがみんなこの地域やまちが好きなんだ、みんなこの地域やまちのことを思っているのだという想いの実感や共感、地域がつながる大きなきっかけとなる。

方策案②誰もが「やってみたい」を発信し共有できる場の提供

「おやまちプロジェクト」では、商店街にある酒屋さんのお店を定期的に関き、アルコールを飲みながら、緩やかなつながりの中で様々な情報交換をしている取り組みがある。その取り組みの中では、実際に参加された方の一言で「子ども食堂」が立ち上がったという実績がある。このように、子どもから高齢者まで、また通学する学生や勤め人も含め、誰もが参加しやすい時間帯や情報交換しやすい雰囲気のある場の設定が重要である。

○ 入りやすく居心地の良い場の確保

居場所づくりでよく言われていることは、「箱もの」をつくっても参加してほしい人が来ないということがよくある。そのため、来てほしい「ターゲット」はどのような世代で、どのようなことを求めている人なのかなどをよく検討し、その「ターゲット」が入りやすく居心地がよくなる場を地域の中で複数確保することが求められる。複数確保できない場合は、同じ場所でも、昼間は子どもや子育て世代が入りやすい雰囲気にしたたり、夜間では、働き盛りの人が入りやすくアルコールの提供を伴うなど、「ターゲット」に合わせた切り替えが大切である。

○ 緩やかな距離感で場を仕切る人の存在

地域の中に複数の場が確保されても、その空間に緩やかな距離感で場を仕切る人の存在は欠かせない。また、場を仕切ることを目的化してしまえば、何かを結び付けなければとか、何かをやるために、参加者に聞き過ぎてしまつては、次回から参加することを躊躇わせてしまうことになる。この場を仕切る人は、結果を求めすぎないことが大切である。

○ 何気ない一言を大切に

場を仕切る人は回を重ねるごとに、参加する人との関わり方が身につけられるので、場を仕切るよりもみんなが継続して来ることを考えることが重要である。継続する中では、声が大きい参加者もいれば、みんなの前ではなかなか言えない参加者もいるはずである。特に気をつけたいのが、参加者の何気ない一言が地域活動の取り組みのきっかけとなる場合があるため、場を仕切る人はこの何気ない一言を聞き逃さないことが重要である。

(3) 方策3 今後の発展に向けた新たな視点と手法

地域と学校の連携・協働といった場合、子ども（児童・生徒）を中心に、地域は、町会や商店街のほかに、地域のパイプ役であるジョインターや保護者で、学校は校長・副校長をはじめ教職員が登場人物として、地域と学校が平等に関わることをイメージしていることがある。このような考え方は、例えば、地域がこんなに学校のためにやっているのに、学校は地域のために何もやってくれない、という考えになりがちである。

今後は、こうした従来の連携・協働の考え方ではなく、地域にある様々な資源を有機的に組み合わせることで、想像しえない偶発的な化学反応をつくりあげるという、「オープンイノベーション」の考え方を取り入れることが重要であり、地域のさらなる発展につながる可能性を秘めている。

方策案①地域資源の活用

先に述べたように、地域は人材の宝庫である。しかしながら、その宝庫である人材を活用しきれていない現状がある。また、学校も地域の中に含めた場合の地域にある人材は、公立の小中学校の教職員、児童・生徒、その保護者、そして町会や商店街のほかにも、学校支援コーディネーター、学校運営委員、青少年委員や地区委員、スポーツ推進委員、民生児童委員や保護司、高校や大学、企業、児童館やまちづくりセンターの職員などなど、挙げればきりが無い。まさに地域は人材の宝庫であり、いかにこのような人材を有機的に組み合わせるかで、これまでになく連携・協働が生み出されるに違いない。

○ 学校の役割は「開かれた学校づくり」

学校は、地域のために動くというよりは、学校そのものがコミュニティや学習活動が実現できるため、地域にとって大きな存在である。ただ、学校の役割としては、まず学校教育をしっかりと行うことであり、そのためにも現在学校はこのように子どもを育てているというように、学校をこれまで以上に開いていくことが重要である。

○ 保護者が地域とのつながりの必要性を感じられる環境づくり

コロナ禍の影響により、PTA活動は約2年間にわたり活動の縮小が余儀なくされ、それにより地域と関わるものが減少している現実がある。その結果、地域とのつながりの必要性が薄れている場合があることから、徐々にコロナが収まり地域活動が再開されるようであれば、保護者に各種祭りやイベントに関わってもらうことが重要である。

そして、関わることで主催者側の楽しさややりがいを知り、やがて主体的に関わり後継者となっていってくれるような環境を整えることが不可欠である。

○ 高校生、大学生との連携

区内には、多くの高校や大学があり、部活動支援や地域の清掃活動等に学生が協力している実績がある。高校や大学と連携することは、参加する学生にも社会人となるための貴重な体験であり、小中学生の子どもたちにとっても少し離れた年上の青年たちとの関わりは憧れの存在としての目標にもつながる。このように、異世代交流ばかりだけでなく、地域課題解決にもつながるため、メリットは大きい。

○ 人とつながり学校とつながることが活動のモチベーション

・活動のモチベーションとは、自分の住んでいる地域がよくなってほしいとか、このまちで心地よく暮らしていきたいというベースが根底にあり、それには多様な人とつながったり、学校とつながることで、活動の取り組みへのきっかけとなる。

・このように地域の中で、顔の見える関係性が広がれば、地域にとっても学校にとっても安心感や信頼関係が生じるため、これまで以上に協力し合える関係性が構築される。

・そのためには、方策2の方策案②「誰もが『やってみたい』を発信し共有できる場の提供」が欠かせない。

オープンイノベーションとは

オープンイノベーションの提唱者であるヘンリー・チェスブロウの著では、「自社だけでなく他社や大学、地方自治体、社会起業家など異業種、異分野が持つ技術やアイデア、サービス、ノウハウ、データ、知識などを組み合わせ、革新的なビジネスモデル、研究成果、製品開発、サービス開発、組織改革、行政改革、地域活性化、社会課題解決などにつなげるイノベーションの方法論」であるとされている。

平たく言えば、オープンイノベーションとは、自組織と外部の他組織のアイデアを融合し、新しい価値を創出するという意味を持っている。

「おやまちプロジェクト」では、すでにオープンイノベーションの考えを取り入れ、これまでにない連携・協働の形をより発展させた「共創」の取り組みを実践している。

おわりに

第 29 期の会議では、「地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみづくり」をテーマに議論を行った。地域と学校の連携は、新しいテーマではない。しかし、少子化や社会的孤立の加速、さらにはコロナ禍による接触機会の減少によって、地域と学校の距離は、ますます遠くなっているのが現状だ。

そこで、「新たなしくみ」なのだが、ここには2つの意味が込められている。1つは益々困難になる連携をどのように実現するか。そしてもう1つは、前提条件の悪化にもかかわらず、そうした障壁を軽々と乗り越えて、これまでになかった取り組みを行っているように見える事例が出現しているのだが、こうした現象をどのように理解し、他の地域に役立てられるか、という視点である。

今回、その事例の一つである尾山台地域の「おやまちプロジェクト」および尾山台小学校、中学校をベンチマークに議論を重ねてきた。おやまちプロジェクトの動きに、「新しいしくみ」を考えるヒントがあるのではないかと、というのが本会議の仮説であった。それは、これまでの学校・地域連携とどのように異なるのか。その連携を実現しているファクターは何か。

議論の過程と提案の詳細は本論を参照いただきたいが、そこでまとめられた3つのポイントは、本会議のオリジナルな成果として重要だと思われる。人と人の橋渡し役となる人材（方策1 連携に必要なジョインターの育成とネットワーク化）、インフォーマルな関係の場（方策2 誰もが参加できる環境整備）、オープンイノベーションによる価値創出（方策3 今後の発展に向けた新たな視点と手法）である。つまり、人と人を結びつける人がいて、多様な人が混ざりアイデアを交換できる場があり、学校や地域の様々な団体が柔軟に役割や計画を修正しながら、地域や学校に求められているものを生み出していく。こうした、次々と新しい動きが生み出されるような柔軟なコミュニティがあるからこそ、地域にも学校にも必要な活動が生まれる。その多様で予測不可能な動きが、結果として「連携」であり「協働」なのである。

連携をめぐる従来の議論では、地域と学校をいかに結びつけるかが焦点化されてきた。しかし、本当に必要なのは、共通の目的（＝持続可能な地域）のために、それぞれが資源を持ち寄り、新しい役割を担い、必要な価値をともに生み出していくプロセスであり、そのためにどのような関係を構築すればいいのかという点である。このように、連携の概念そのものが問い直され、再構築されたことが、本会議の提案の革新といつてよいだろう。

もちろん、一足飛びにどの地域でも可能な道筋を提示できたわけではないし、新しい連携のための要件整理もまだ道半ばである。それでも、ここでの議論が今後いくつかのフィールドで花開いていくのではないかと。そんな期待を感じている。

最後に、こうした知見が得られたのは、地域や学校、多様な立場で多くの経験をお持ち

ちの委員のみなさんの力に他なりません。改めて心から感謝申し上げます。今後も世田谷でわくわくする「地域と学校の連携」事業をご一緒できましたら幸いです。

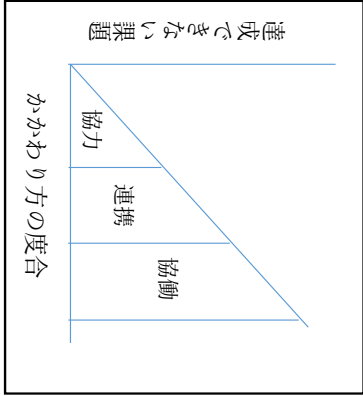
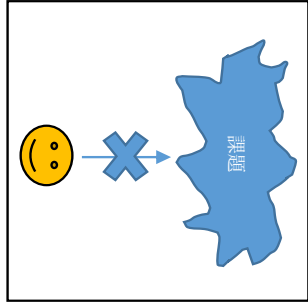
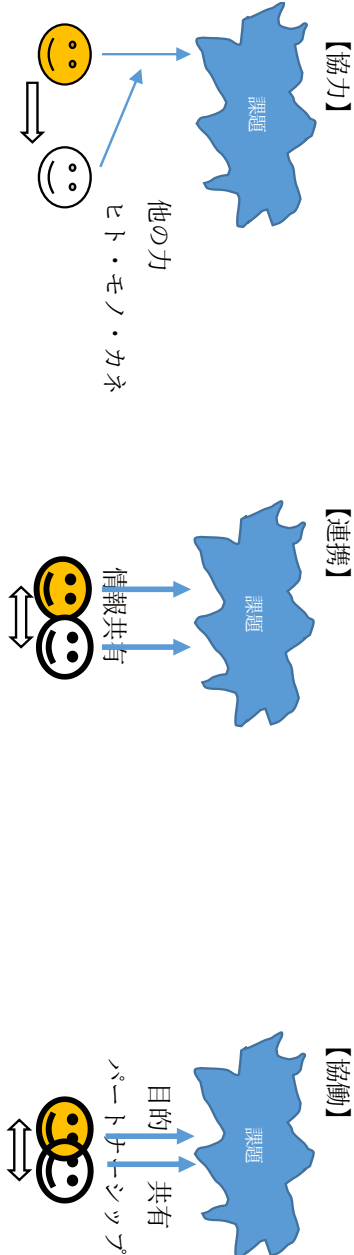
第 29 期社会教育委員の会議 議長 坂倉杏介

協力・連携・協働のメカニズム（※第2回定例会配布資料）

□定義

- 協力とは・・・力を合わせて事にあたること。「協力を仰ぐ」「事業に協力する」*デジタル大辞泉
 - 連携とは・・・互いに連絡をとり協力して物事を行うこと。「他団体と連携して運動を進める」*デジタル大辞泉
 - 協働とは・・・同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働くこと。*デジタル大辞泉
- ※共通して言えることは、個人・組織では達成できない課題に対して他と力をあわせること。

□協力・連携・協働のイメージ（達成できない課題によりかかわり方が異なる）



□身近な活動例（学校運営委員会、学校支援地域本部、おやまちプロジェクト、世田谷はぐくみプロジェクトなど）

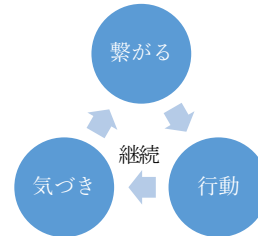
○世田谷はぐくみプロジェクト 協力先：中学校 協力内容：場所の提供	○	○
--	---	---

□資料2 「連携・協働」関連ワード（第3回定例会議事録抜粋）

□ どういうふうにすると「連携・協働」が生まれていくのか

○秘訣・条件

- ・偶然の出会いや偶然にあったことを見逃さない
- ・「おやまち」の場合、何かやってみて、起こることをちゃんと振り返って、次につなげていく
- ・立場が違って、思いが共有でき、関係性ができれば領域を横断していろんなことが動かしていける
⇒それが起きにくいのは、立場が違う人とあまり会う機会がないとか、あったとしても思いは聞けない
⇒立場の違う人と割とすぐ思いをすぐ語る仕組みが生まれてくると、さらに加速される
- ・こういう活動で重要なのは、人、物、金、時間
- ・長続きしたり、発展したりするというのは、立場の違う人とちゃんとつながること
- ・協働が始まったり、続いたりする要素とは



○何が必要か（ヒト、モノ、カネ、情報、時間）

- ・そのまちのそれぞれの資源を使ってやっていくということが大切
⇒まちの資源とは
- ・資源があっても、熱意のある人がいないとなかなか動かないのではないかな

□ 地域と学校の関係性

○状態・関係性

- ・両者のつながりといってもいろんな水準がある
- ・つながっていても、「協力」はそこかしこで何らか協力し合っている
- ・両者が一緒になって一歩踏み出さない限りは起こらないようなことで、その関りの深度って実はいろいろあるのでは
- ・地域から何かをしていただくことがどうしても多くなり、学校が何か地域に貢献できているとか、実感を得にくい
- ・学校から要請があって、地域が協力するという形の例は各地域でいろいろある
- ・学校がどうしても地域にお願いする形になりがちだが、ウィンウィンの関係になればいいが、一方通行になりがち
⇒結果的に子どもたちのため、学校のためにやることが、地域の大人たちの学習やつながりとして地域の人たちにメリットになるのでは
- ・校長先生の人柄に左右されがちだが、校長先生が担うべき役割とは
⇒学校の働き方改革が大きな課題

⇒地域の方もボランティアでやっているの、学校の教職員も個人の判断に任せながらボランティアでやっていくというところで供する部分になっていくのでは

⇒やったら楽しかったという雰囲気の中で、来年もやるぞみたいな雰囲気にしていくことが重要か

- ・特に土日は部活動をやっているため、教員を地域に出せない状態が常が続いている

⇒実際になぜ学校が動きにくいのかをしっかりと特定することはすごく大切

- ・やらなければいけないと思うと全然長続きしないので、結局はやりたい、楽しいというのが、続いている一つの秘訣では

- ・人と人がつながるポイントとは

○人材

- ・おやじの会とかに関係している人が主体的に動いて、新しい対応策をつくっていく

⇒日常的につながりがないと、知らない人同士が協力し合うってなかなか難しい

日常的な関係があるからこそ、コロナ禍などの状況でも協力し合える

- ・おやじの会は（人材の）宝庫

⇒専門性をその地域の中で父親として発揮する機会ができると、地域の中での活躍のきっかけにもなる

- ・自分のやっていることが中学生の役に立つんだということで、モチベーションが上がる（相乗効果）

- ・キーパーソンの仕掛け

- ・最初のメンバーが高齢化して若手が入ってこない

- ・人材の確保が一番の課題

- ・偶然を見逃さず、語る場の機会をつくる

運営されている方はもう一歩いけそうな人を見逃さないで、声をかけたり、語る場をつくったりするといいのでは

- ・終わった後の反省会という名の交流の場が大切

- ・学校の仕事もし、地域のお祭りに出ている先生の話聞いてみる機会というのは実は大切

- ・学校と地域の協力の度合いだが、むしろ地域の方が学校のために何ができるだろうと、学校を支えるためにどんなことをしようかというような気持の方が多いのでは

⇒学校で子どもたちが元気に安全に過ごすために何ができるだろうというのを常に考えているので、学校に求めることと言えば、やはり何かをするときに場所を提供していただけることではないのでは

○効果

- ・地域のお祭りで、地域が学校を使わせていただくことで、つながりができ学校のほうからも地域をお願いをするのがしやすくなる

⇒続けている効果として、相互の協力、交流の連鎖が起きている

⇒続けていける要素とは

やはりできているのは、それなりに人がつながっている、思いが共有できている部分がある

- ・ 小学校の夏休み中に、地域の方々の特技や趣味を生かした遊びや学びの機会を提供する活動を学校を使って行っているが、子どもたちの居場所になっている
- ・ 専門性をその地域の中で父親として発揮する機会ができると、地域の中での活躍のきっかけにもなる
- ・ つながり方が変わると起こることも変わる

⇒地域の中で自分の能力を発揮すると、役割がどんどん多面化していったって、地域の中に入っていくきっかけが生まれたり、関係性がどんどん実体化していく

○課題

- ・ 学校が地域できることとは
- ・ 学校の働き方改革
- ・ 人材の発掘と確保
- ・ 偶然を見逃さず、語る場の機会をつくるには
- ・ 構造化された組織コミュニティから創発的なコミュニティへ
- ・ 担い手の高齢化
- ・ 活動の継続化

□資料3 グループワーク①《地域グループ》話し合い概要

□ なぜ「連携・協働」をするのか

- 「連携・協働」する必要性とはなにか
- 「連携・協働」によって得られることはなにか
- 成し遂げられることはなにか
- 誰が得をするのか
- どういう未来をつくりたいのか（目指すべきものはなにか）

⇒ 「安心して住み続けたい」

↓ 学校と連携する必要性 「子どもの成長」「元気をもらう」
「学校には安全安心がある」「多世代交流」「顔の見える関係」
↓ キーワード「信頼関係」「安全安心」
「地域も学校も生き生きする（相互の活性化）」
↓ 「子どもは未来」「地域の財産」
「安心して住み続けたい場所」「子育てしやすい」
↓
「児童生徒の増加」

□ 「連携・協働」できない阻害要因とはなにか

- 「連携・協働」の邪魔・壁となっているものはなにか

⇒ 「デイホームや老人ホームと学校の連携」

↓
「条件付きの人が学校に入ると問題行動を起こしかねない」「個人情報の問題」
↓
「地域側が“安全”をどのように連携し、自分たちの活動を守っていくのか」

⇒ 「学校」との連携

↓
「地域に協力者を求めても誰でもいいわけではない」「その人がどういう人かもわからないと心配」
「信頼関係や顔の見える関係が広がらないと不安」
↓
「地域の特性に基づいた客観的なルールづくりが必要か」 「連携の前に地域の人がつながっていないとクリアできない」
「誰もが参加できハードルの低いルールづくりを」

⇒ 「学校はもしかしたら地域との連携を望んでいないのでは」

↓
「winwin の関係とあるが、学校が地域を支えるのは難しいので互角でなくてもいいのでは」「地域の win が大きくてもいいのでは」
↓
「互角でなくてもいいと思えば、学校（先生）の負担も軽減されるのでは」

⇒ 「安心して住み続けられるまちにしていけるためには、学校は関係ないというわけにはいかない」

↓
「まちづくりセンターなどの施設があるが、法律にとらわれず自由に地元の人が動けるのが学校を中心としたコミュニティなので、そこをもっと発展させると明るいまちになるのでは」

↓
「知らない人が心配とか危ない人というのは、知らないからなんで知り合えば大丈夫。知り合うのをどこでつくるかが今コミュニティ」

⇒ 「女性の社会進出によって母親が多忙化し、お迎えなど父親が活躍している。おやじの会なども。」

↓
「従来は母親の資源を調達しやすかったのが今のやり方になっているが、調達しにくくなっているにも関わらず、同じやり方は無理ではないか。だから違うやり方にしたほうがいいということか」

↓
「母親だけではなく父親や先生もそうだが、みんなで関わるのが大事。新しい形としてやっていけたらいいのではないか」

⇒ 「通学路の見守りなど地域の方がやっているところがあるが、どんどん各地域で起こしていけるのではないか」

↓
「基本構造として学校中心で考えると、学校のルールが分かる人以外は入れない（危険）。それではコミュニティがないからと乗り越えられるかどうかは、学校以前にそこにちゃんとした地域にそういうつながりがあるかどうかということか。地域差がどうしても出てしまうが」

↓
「地域差が出てもいいと思う、各地域の特徴を生かした何かできることをそれぞれで考える」

↓
「逆に言うとかどこでもやらなければいけないというのがよくない」「地域の違いがあっても協働してつながっているというものを考える」
「ここに核となる人はどんな人がいいのか」

↓
「そこは人。ちゃんとやってあげると気が楽になると思う」「すごく密なのがいい人と、関係性は緩やかなほうがいい人と」

⇒ 「子どもが中心であることが大事なので学校だと思っている。子どもを真ん中に地域がままとまるということで学校だと思っている。子どももいずれ大人になっていく（循環していく）」

□資料4 グループワーク①《学校グループ》話し合い概要

□ なぜ「連携・協働」をするのか

○「連携・協働」する必要性

「学校は地域活動の拠点だが、公園や町会などあくまでもその一つ」

⇒ 「地域の協力的なしには成立しない学習内容（小学校のまち探検、地域めぐりなど）」

↓

「教員の負担軽減になっている（学習サポーターの協力、地域のボランティアによる安全確保など）」

【学校施設の公共性】

「避難所や集会所代わりなどに利用」

【次世代への（教育の）連続性】

「小学校6年間、中学校3年間、卒業してもしばらく地域に住むので、次の世代に何かいろんなことを連続させていくために必要」

「地域との連携の効果としては、時代を超えた教育の連続性（教員は異動により代わっても地域がどんとあると地域の特性とか連続性が保てるのでは）」

【地域のよさ（歴史・経緯）】

「『地域とは』と考えたときに、子どもが学校に来て、子どもが住んでいる家の集まり、子どもの保護者とその背景にある地域、地域の歴史・経緯も含め、子どもたちが今ここにこの地域がずっと昔からあるからで、広散的にも長期的にも子どもたちが今あるものを支えてくれているものだと思う」

【大人総がかりで子どもを育てる】

「一番大きな効果は、大人総がかりで子どもを育てていることになるので、キャリア教育の充実や市民教育みたいな良き市民をつくっていく効果があるのでは」

○「連携・協働」するメリット

「挨拶運動は非常に地域と学校が協力してやられている」

「高齢者の生きがい（子どもたちのため）が意欲のモチベーションになる」

「学校のメリットとして地域の教育力の活用（ゲストティーチャーなど）」

「学校と地域のメリットでは地域財産の活用（弦巻の水道塔：地域遺産）」

「学校と地域がwin-winの関係を築く（両者がwin-winになれば理想）」

「地元の学校に通う意義」

「昔は夜集まって防災にかこつけて地域の方と飲むということがあった。これも地域（学校も含めた）の一つの団結力。大人だけでなく子どもにも付随してくれば地域のメリットになる。そうしていかないと『win-win』の関係がなかなかできない」

⇒ 「学校の先生も地域の人材は助かると思っているが、でも日頃の授業があって部活があって、地域活動なんてやれないというのが本音かもしれない」

↓

「コロナで学校が閉じてもできちゃう。だからコロナが収束した後、どうしていかうかという悩みがある。現在は様々なことがなし、なしで回っていくため」

【地域の人材】

⇒ 「学校の先生だけでは教えられないこと、いろんな経験をした地域の方がたくさんいる（多様な職業人によってより広い世界を子どもたちが知る機会となる）」

↓

「地域のことは地域の人がよく知っているので、地域の特徴・特性を生かすためにはその人たちの力が必要」「学校にとっても地域の人材は安心感があるのでほしい」

↓

「地域の人と子どもが学校を介して知り合いになる、顔見知りになるのでお互いにとっての安心感が生じる」

↓

「子どもたちにとって地域はふるさとになる。地域の人と関わり何かをやったことで将来的に地域の力になる、地域に戻ってくることにつながるいい」

↓

「地域への帰属意識が高まる（私は地域の子（一員）みたいな）」

↓

「成人式もそうだが中学校の仲間とか、帰属意識というものがある。地元の学校としては、彼らはまた戻ってくる、戻ってきて地元のために活躍していく」

【安全安心】

「コロナ禍により、私立校は公共交通機関を利用して分散登校をするが、公立校は地元にあるため安全安心の場所に学校はなっている」

「学校が避難所になる。災害拠点になることは地域にとって非常にメリット」

「顔見知り、顔つきが分かるといいうところでは結果的に安心につながる」「顔見知りが増えれば防犯など安全が得られる」

⇒ 「『安全安心』の種類では、『コロナ』『防災・防犯』『帰属意識』『高齢者の生きがい』なども安心感につながっているのでは」

↓

「『安心感』は学校でのメリットでもあり、地域のメリットでもある」

○「連携・協働」の課題

【時間的余裕のなさ】

⇒ 「先生は忙しいし余裕がない、働き方改革」

↓

「担任の先生と地域の人との接点が時間的に難しく持てない」

↓

「地域の方によくしてもらっているが教育課程上やるべきことに追いつけられ、やはり時間はネック、時間をどう持つのか、どう乗り越えるかが課題」

○その他

「コロナにより学校の在り方が一変した。地域の人と会う機会が全くないので地域が全く分からない。それでも学校はやれちゃう。」

□資料5 グループワーク②課題抽出

【地域グループ】

- 連携する意味、必要性ー「ずっと住み続けられるまち」であるために
- 学校はコミュニティや各種活動が実現できる地域にとって大きな存在
- 学校の役割
- 地域と学校の関係性
- 学校をつなぐ存在とPTAは人材の宝庫
- 「おやまちプロジェクト」は、生活感があり、やってみて楽しいような感じがいい
- 商店と小学生が一緒に何かをやる
- 地域の中の大学とのつながり
- オープンイノベーション1.0→2.0へ
- 人とつながり学校とつながることが活動のモチベーションとなる

【学校グループ】

- 連携・協働の必要性とメリット
- 小学校と中学校の連携
- 地域と小学校、地域と中学校
- 連携に必要なキーパーソン
- 学校は地域のために何ができるのか
- 学校に来てくれる人たちとお互いに安心してやっていけたら、まちづくりにいいのでは
- 保護者の地域に対する認識はどうしたら変わるか
- 結局学校と地域を結びつけるのはPTA（保護者）
- 日頃の関係性は挨拶一つで大きく違う
- 若い世代は失敗することを恐れている

【全体意見交換】

- 学校の存在感
- 連携で欠かすことができないPTAの存在
- 若い世代の保護者や教員の意識改革
- 従来の関係性からオープンイノベーションへ

□資料6 会議の活動経過（第1回～第8回）

今期の活動経過は以下のとおりである。

- 第1回 令和2年10月30日
「テーマの方向性の検討」
- 第2回 令和2年11月18日
「事例研究①『おやまちプロジェクト』現地視察と意見交換」
- 第3回 令和3年2月26日
「事例研究①の振り返りと関係性のしくみの検証」
- 第4回 令和3年6月28日
「新たな連携・協働のしくみづくりに向けた課題の抽出・整理と方策について－グループワーク①－」
- 第5回 令和3年11月15日
「新たな連携・協働のしくみづくりに向けた課題の抽出・整理と方策について－グループワーク②－」
- 第6回 令和3年12月13日
「新たな連携・協働のしくみづくり骨子案の検討」
- 第7回 令和4年1月26日
「活動報告書案の検討について」
- 第8回 令和4年2月18日
「第29期社会教育委員の会議活動報告書のまとめ」

□資料7 第29期社会教育委員の会議委員名簿

	氏 名	選 出 母 体 等	備考
学 校 教 育 関 係 者	こ 泉 一 弘 いずみ かず ひろ	世田谷区立小学校長会 世田谷区立多聞小学校長	
	おく だい ゆう じ 奥 平 雄 二	世田谷区立中学校長会 世田谷区立玉川中学校長	
社 会 教 育 関 係 者	かぎ わ だ かず あき 鍵 和 田 和 明	世田谷区青少年委員会会長	
	むら かみ ゆ み 村 上 由 美	世田谷はぐくみプロジェクト 代表	
	ごん だ くに こ 権 田 邦 子	世田谷区青少年委員OB会 理事	
家 庭 教 育 の 向 上 に 資 する 活 動 を 行 う 者	やま ざき つとむ 山 崎 勉	世田谷区保護司会理事	
	よし おか やす こ 吉 岡 泰 子	元 世田谷区立小学校PTA 連合協議会会長	
	しん かい み き 新 海 美 紀	元 世田谷区立中学校PTA 連合協議会会長	
学 識 経 験 者	さか くら きょう すけ 坂 倉 杏 介	東京都市大学准教授	議長
	ほり い まさ みち 堀 井 雅 道	国士舘大学准教授	副議長

任期：令和2年6月1日～令和4年5月31日

□資料8 第29期社会教育委員の会議事務局名簿

肩 書	氏 名	備 考
生涯学習部長	はやし かつ ひさ 林 勝 久	～令和3年3月31日
生涯学習部長	うち だ じゅん いち 内 田 潤 一	令和3年4月1日～
生涯学習・地域学校連携課長	た むら とも あき 田 村 朋 章	～令和3年1月31日
生涯学習・地域学校連携課長	たに ざわ しん いち ろう 谷 澤 真 一 郎	令和3年4月1日～ 令和4年3月31日
生涯学習・地域学校連携課 社会教育係課長補佐	おお い たけ し 大 井 健 史	～令和4年3月31日
生涯学習・地域学校連携課 社会教育担当係長 社会教育主事	み その う けい いち 御 園 生 恵 一	
生涯学習・地域学校連携課 社会教育係主任	せい の ゆう た 清 野 雄 太	